
改正

工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
改正

【Nコード】
N9811C

【作者名】
工場長

【あらすじ】
ある日女子高生の上杉浩子は二人の男女によって誘拐されてしまう。連れられた先には数人の誘拐された少女たちがいた。自らの目的を明らかにする犯行グループ、誘拐された家族の苦悩、その周囲で野心を持つ人々、事件の解決を目指す警察。一つの法律の改正をめぐる事件が国を揺さぶる。

第一話 浩子の不満

寒い。これ以外に何を言えればいいのだろう。時間は十二時を過ぎている。今日は朝から晴れ、だから当然暖かくなってもいいのに……。と上杉浩子は思った。

「まったく、なにが『今年は暖冬です』よ。一体誰が言ったのかしら」

最近彼女に会った人なら必ず聞けるセリフである。気象庁やマスコミの暖冬の予報を見事に裏切り、ここ東京でも週に一度は雪が降るといふ記録的な冬になつてしまつたのだ。

「まっ、愚痴を言つてもしょうがないんだけどね」
浩子は肩をポンと叩いた。

今日も部活動の練習は雪かきだつた。週に一度の大雪は浩子の所属する陸上部のグラウンドを容赦なく覆つてしまつている。そのために練習の時間の大半を雪かきに費やすのである。

雪を除いてもグラウンドはグチャグチャになつてしまい、とても走ることはいできない。

(せっかくの日曜日なのに……)

走るために学校に来た浩子としてはかなり損をした気分だ。有名な私立の女子高に通つている浩子だが、決してお嬢様ぶらず部活動に励んでいる。スポーツ大好きな家庭に生まれたこともあり、浩子にとっては生きがいといつても過言ではない。

しかしここ最近の天候は、浩子に欲求不満を与えるだけではなかつた。

「まあ腕の筋肉がつくから雪かきも役にはたつけど」

愚痴を言つのはやめて物事をいい方向に捕らえようと思つた浩子だったが、目の前を並ぶ枯れた桜と、それに寄り添うようにある根元の白い雪、その光景を通り過ぎる風に浩子はまたしても

「寒い」

と、口に出してしまった。

いかにも暖かそうな二人を浩子は見つけた。浩子の進行方向の先この桜並木に入った時からすでに止まってあったワゴンの中にその二人がいた。

男女二人が互いに体を寄せて話し合っているところを見るとカップルだろうか、恋愛にはあまり興味がない浩子だが、二人の空気と自分のいる空気かなりの温度差が生じていることを感じて腹立たしくなった。

（あんまり止まっていると警察来ますよー。だ）
駐車禁止の標識の前で止まっている二人に浩子は心の中で毒づいた。

すると、二人がほぼ同時に車から飛び出してきた。聞かれた？と浩子は動揺するが、当然そのはずは無い。

男は地図を片手に頭をぼりぼり掻きながら辺りを見回している。頭を掻くのは困ったときのクセなのだろうか、男の表情からそれが窺える。

黙って立っていれば女性にもてるであろう彼の容姿だが、今の状態はすっかり三枚目になってしまっている。

「もう遅刻じゃない！」

「ちよつと待てよ！」

怒鳴る女性にやり返す男。道に迷ったのかそれがもとでケンカになっっているようだ。

（なんだ、幸せじゃなかったのね）

なぜかホツとした浩子はそんな二人を横目に通り過ぎようとしたが…。

「あの、すみません！」

と、女性が話しかけてきた。

浩子より少し年が上といったところか、髪が短く浩子と同じくらい、いやそれ以上に元気がありそうな彼女がさっきよりも多い音量

を持つて一生懸命に来たので。

「はっ、はい」

と、立ち止まってしまった。

「道に迷ったんですけど」

両手を思い切りグーにして浩子に迫って来る。対照的に浩子は思い切り両手をパーにして引き下がろうとした。

だが次の瞬間、浩子は視界を急に上に向けた。空がある。それはすぐに消えた。

浩子が次に見えた視界。それは闇だった。低いモーター音、体に伝わる振動、自分の体を拘束する何か。自分は何者かにさらわれてしまったのだ。両親から耳にタコが出来るほどこの事態の可能性を教えられた浩子であったが、まさか現実となるとは。

第二話 高速道路

ハンドルを握りながら藤田隼人は歌を歌っていた。この高速道路を通ると必ず口ずさむ歌である。しかし、サビの僅か一小節を歌うだけでその後は黙ってしまう。

「それで、その後は」

と、助手席にいる加藤里美かとうさとみがその沈黙をとがめる。

「忘れた」

あつさりと自分の記憶不足を彼は認めた。

「はい、知らないなら歌わない」

「じゃあお前はこの続きを覚えているのか？」

「……えーっと……」

しばらく考える里美であったがやがて悔しそうにうつむいた。

「そらみる。覚えてないじゃないか」

隼人は得意気にちらりと里美を見る。

「よく昔は歌っていたのにな……」

里美の表情がやや少し暗くなった。

「そうだな……」

隼人の表情も暗くなった。しばらくの無言の後それを破るように

里美が、

「しかしそれにしても私たちって運がいいよね」

「何が？」

「だって六人とも一人で歩いていたらなんて、目撃者はゼロじゃん」
彼らの運転するワゴンの後部座席には、二人の少女が一人列に一人ずつ気を失っていた。目隠しをされて口にはガムテープ。手足は縄できつく縛られている。

ワゴンの後部座席はマジックミラーなので、外部の人間は隼人と里美が仲良くドライブしているとしか見えない。

前の列に横たわっていた髪の短い女子高生が目を覚ましたのか頭

を必死に持ち上げようとしている。

「お目覚めね。上杉浩子さん」

里美がその女子高生 浩子 に話しかけると、彼女はビクツと反応した。

「これから誘拐する人の名前くらい知っていたっておかしくないでしょ」

「んーっ、んんーっ」

浩子は体を大きくくねらせながら必死にうめいた。

「大丈夫よ。すぐに殺すわけじゃないから。……まあ浩子ちゃんの家族しだいってことになるけど……」

車は中央高速自動車道を進み、山奥に近いインターチェンジで降りた。そこから雪深い山中を通り、一軒の山荘にたどりついた。時刻は午後五時。辺りは日が暮れて何も見えない。雪のせいで何も聞こえない闇の世界へと入りかけた時だった。

浩子はその山荘の地下室で拘束を解かれた。視界が開けた浩子が最初に目にしたのは、桜並木で浩子に話しかけた藤田隼人と加藤里美だった。

「適当なところに座れ」

「あたしをどうするつもり？」

浩子は隼人を思い切りにらみつけた。

「いずれ分かる。とにかく座れ」

隼人に指示されて浩子は座るところを探し始めた。部屋は明るくきれいにされている。よくドラマなどで見る人質の部屋というはいかにも埃っぽい感じなのだが、それとは正反対の部屋である。

隅のほうで、四人の少年少女が座り込んでいた。浩子と同じくさらわれた人たちだ。そのうちの三人は少女で浩子と同じ高校生もいれば、小学生もいる。唯一の少年は小学校に入るか入らないかの年頃に見える。

みんな恐怖と不安の表情が現れてはいるが、あざや切り傷など暴力を受けた様子は無いようだ。

(この子達も……あたしと同じなの……?)

「田原さんも座りな」

田原さん 田原明美たはらあけみは浩子と共にさらわれた少女の名だ。浩子と同じ学校の制服を着ているが、始めてみる顔だ。身長は浩子と同じくらいであるが、髪は長く後ろで一つに縛っている。

明美は最初視線を落とし、怯えた様子で辺りを見回していたが、浩子の制服が眼に入ると視線を上げた。そして浩子の顔をみるなり、「あっ」と驚いた表情を見せた。

浩子は明美に目で合図をした。そして視線をチラチラと自分の座ろうとしているところに向けた。その意図しているところが明美にも通じたらしく、二人は隣同士に座った。明美が隼人たちに聞かれないように先に話しかけてきた。

「上杉……先輩ですよ」

「そうよ」

浩子が答えると明美は、

「い……一年の田原明美です。先輩の噂は聞いています。よ、よろしく願います」

と右手をこつそり差し出した。

「明美ちゃんね。あたし、上杉浩子。こちらこそよろしく」

二人は握手を交わした。これから先自分の身に何が起こるかわからない状況の中で、浩子は少し心が癒されたような気がした。

明美の言うとおり浩子は学校ではかなり有名な存在である。陸上部で中距離選手としてかなりの好タイムを連発しており、三年生卒業の後にはキャプテンになるだろうと部の内外ですでにささやかれている。

しかし浩子にはそれ以上に有名たる理由があった。

「全員そろったところで次の作戦にいくか」

と、隼人が携帯電話を手にした。

「まずは誰からかける？」

明美も携帯電話を手にした。

「決まっているだろ」

隼人は浩子を見ると歩み寄り、尋ねた。

「聞きたいことがあるんだが……」

第三話 二つの電話

腕と顔が正確に動き続けている。水をかく腕と息を求める顔、それは百メートルを過ぎても疲れる様子は無い。

民主自由党（略称：民自党）の党首にしてこの国の総理大臣でもある上杉景正（うえすき かげまさ）六十五歳は元氣そのものである。公務の合間をぬって泳ぐことは、政治家としての体力づくりのための習慣であった。

前の総理との激しい派閥争いの末に党首の座に就き、内閣が誕生して二年三カ月にもなるが、前総理支持派は隙があれば景正の足を引つ張ろうとしている。国会では野党の議席が増え、公民党と連立を組むことでなんとか安定過半数を確保している状態。内閣発足当初は、「いつ倒れてもおかしくない」とマスコミに報道されていたが、彼の人柄と決断力の良さで「長期政権もありうる」と評価されるまでになった。

プールから上がった景正の肉体は六十五歳のそれとは思えぬ頑丈なつくりとなっている。目も耳もまだ衰えを知らない。毛髪の濃さも量も豊富だ。やはりプールで運動しているせいなのだろうか。

「総理ー！」

初めての選挙のときから一緒である秘書の千坂平蔵（ちさか へいざつ）が、同じく秘書の色部陽一（いろべ けいいち）を連れて慌ただしくプールサイドを走る姿が見える。

「千坂君、走つてはいけけないと言っているではないか」

「そ、総理……お電話……」

息も絶え絶えに頭を下げる千坂。年は六十四で景正より若いのだが、日頃の運動はしていないのでかなり疲れたらしい。

「総理に陳情したいとの電話です」

三十代と若い色部が変わりに答える。

「……？」

景正は首をかしげながら電話を受け取った。彼の携帯電話の番号を知っているものは”陳情”という他人行儀なことはしないのだが

……。
「私が総理の上杉景正だ」

電話の相手は藤田隼人である。

「あんたが総理さんかい。ちよっとお願いがあるんだ」

隼人の失礼な態度に景正はムツときたが、冷静に応じる。

「話を聞きましょう」

「少年法があるだろう。あれを三月三十一日までに改正してほしいんだ」

「君ね、法律というのはいきなり変えてくださいと言われても『ハイ、そうですか』とできるものではないのだよ。それに君も知っているだろう、少年法の問題は各方面からいろいろな意見が出てきて調整するだけでもかなりの時間がかかるのだよ」

景正は隼人になんとか諦めてもらおうと話したが、隼人はそれを許さずこう切り出した。

「だめならお孫さんを殺す」

「何っ!？」

ここに来て景正の声が初めて荒くなった。秘書だけではなく周囲の水泳客がいつせいに彼に視線を向ける。

「浩子ちゃんだっけ、こつちですすでに身柄は預かっている。なあにあと二ヶ月もあるんだ。それに他の政党の顔色を窺う必要も無い」

「おい、貴様! 浩子に何をするつもりだ!」

景正の声はますます荒くなり、顔には怒りの表情が出る。周囲の人も事態の異様さに気づいたようだ。

隼人はかまわずに話を続ける。

「よく聞けよ、この事はすぐにマスコミに話せ。全てだぞ。今日は日曜日だから……。夜十一時のニュース、あれに間に合わせてくれ」

「十一時だな、それで浩子は無事なのか?」

「総理!」

隣で千坂が興奮している。今にも電話の相手を殴りかからん勢いである。

「最後に少年法の改正案について俺たちの希望をいくつか言っておく、ちゃんと入れるよ」

「な……！」

隼人はその”希望”を言うと電話を切った。そして浩子を見て笑う。

「ずいぶん孫思いなんだな」

隼人と里美は分担して他の政党　公民党・民進党・社労党・共
民党うみんとう　に同様の電話を入れた。彼らは与野党を問わず、主要五政
党の党首の家族を人質に取ったのだ。それが終わったあと、隼人は
最後の一人　唯一の政党関係者ではない田原明美　の家族へと
電話を入れた。

この日の田原法律事務所は平穏だった。依頼人も依頼の電話も無
い。ただ五時ごろ、

「明美が帰ってこないの」

と、妻の由起子ゆきこから電話があつたが、

「友達と遊んでいるんだらう」

そう答えて切ったぐらいである。

田原貴男たばら たかおは書類の整理を終え、いつも通りに帰途につこうとして
いた。

「先生、急な依頼の電話です」

と事務員に呼び止められた。

（運のいい人だ）

貴男は快く電話を受け取った。

「もしもし、お電話変わりました」

「人権さん、こんばんわ」

「!?!」

貴男は驚いて受話器を見つめる。

「日頃人権を訴えている弁護士の先生ですね。あなたの娘さんの身

柄をこつちで預かせてもらいました。場合によっては命を奪うことになりませんが、ご了承ください」

先ほどの電話とは正反対の隼人の口調である。

「どうすれば……娘は……明美は助かるんだ！ 金か？」

「何もなくていいですよ」

「いい？」

自分の耳を一瞬貴男は疑った。

「この後のニュースでも見ながら自分の過去の行いを反省してください。今夜のは特にね。三月三十一日までに帰ってこないのなら娘さんは死んだものと思ってください。そうそう、警察にはこう連絡してください。『総理大臣の孫と一緒にさらわれた』と、そうではないとただの誘拐事件になってしまいますので……」

電話はそこで切れた。

「おつ、おい、待て……！」

返答は無い。受話器を置く貴男の顔は蒼白となっていた。

(自分の過去？ 一体何が……)

震える手を抑えながら、とうにか彼は妻へと電話をかけた。

隼人は人質の六人を集めた。

「聞いてのとおり俺たちの目的は少年法の改正である。期限の三月三十一日までお前たちを拘束する。衣食住の保証はするから心配するな。風呂も入れる。ただし一つしかないから男女時間をずらすこと」

前半部分を除けば、遠足の学校の先生の諸注意みたいである。

「ただし、脱走しようとするのは甘いぞ、俺たちは二十四時間お前たちを見張っている。……まあこの季節だ、上手く出られても凍死するのがオチだ」

隼人は窓の外を見た。黒い闇に白い雪が舞っている。

「凍死しても死体の面倒は見られんぞ！」

第四話 記者会見

食事の時間となった。浩子たちは一階へと集まった。この山荘の持ち主である岡部幸成・政子夫妻手作りの夕食を孫の政也が並べる。岡部夫妻はいかにも人の良さそうな夫婦である。この料理の味と見栄えの良さを見ると、この初老を迎えた夫婦は、ここをペンションにするつもりだったのではないか。

孫の政也はあまりしゃべらない男であるが、そのしぐさからやはり老夫婦から受け継いだ人の良さが感じられた。

「ごちそうさまでした」

食事を終えた浩子が部屋へ戻ろうとすると、幸成は目を細めて笑顔で、

「味はどうだった」

「うん、すごくおいしかった」

浩子は素直に答える。

「そうかい、それはよかった」

目がますます細くなる。

「思ったより早かったな」

地下室と食堂をつなぐロビーで、隼人が政也と共にテレビを見ていた。

時刻は午後九時である。「ニュース速報」というテロップの後で、アナウンサーがお辞儀をした。

「こんばんは、この時間は当初の予定を変更して臨時ニュースをお送りします。政府より何か緊急の会見が開かれるそうですか……」

「何か」ということは、まだ誰も事件のことは知らないようだ。その「何か」で集まった記者の前に、官房長官の直江信太郎が現れた。

「本日午後六時頃……」と直江は事のあらましを記者団に伝えた。

その中には田原明美のことも含まれていた。

記者団に動揺が走った。人質を取って要求をする、といった事件は過去に無かったわけではない。が、主要政党の党首の家族を人質に脅すといったような事件は前代未聞であり、この国の議会政治に挑戦状を叩きつけたといっても過言ではない。

「次に少年法改正案に対する、彼らの要求を申し上げます」

「一つ、刑事罰対象年齢をその年に中学校に入学する者からとすること。」

「二つ、犯罪者の顔と名前を公表すること。」

「三つ、少年裁判は成年の刑事裁判と同じくすること。」

最後の四つ目は、最高刑を死刑とすることであります」

直江の姿が、カメラのフラッシュによって激しく点滅している。

「我々は人質の命を最優先に、全力をもって人質の解放と事件の解決に取り組む方針でございます」

と叫ぶと、直江は記者団の質問を無視して会見場を後にした。

想像もつかなかった会見の内容と、自分にいきなりカメラが代わったことでアナウンサーは慌てながら、

「お、お聞きのとおり……」

と言ったところで画面は変わり、コマーシャルが流れた。着ぐるみの動物たちが、女の子と楽しそうに遊んでいた。

「政府はどう対応するのでしょうか？」

「そっちなあ……」

政也の問いに答えようとした隼人だったが、浩子を見るなり政也を手で制した。

「見たいのならこっちで見な」

浩子は見ると見るべきものは見たので必要はない、と隼人に断った。

里美と明美がバスタオルを片手にロビーへ入ってきた。

「上杉先輩、まだ入ってなかったんですか？」

「う、うん……」

浩子は返事をするなり、ある事実気づき表情を暗くした。

(私の服、この制服だけじゃない……)

「大丈夫よ、女の子の服なら私が用意しているから」

里美が浩子の心配を打ち消すように肩を叩くと浩子は反射的に「えっ！」と顔を上げた。

「衣食住の保証はすると言っただろう」

テレビを見ながら隼人が一言、さらにもう一つ。

「サイズの保証はしないが。……大丈夫だろう」

余計なお世話だ、と浩子は隼人を睨むとスタスタと風呂場へ向かった。

浩子たちの寝る部屋は地下にある。きれいな畳十何畳分の広さにきちんと六人分の布団が敷かれている。男女別というわけには行かなかったが、まるで修学旅行のような雰囲気浩子は感じた。

「先輩……」

右隣の布団に寝ていた明美だ。

「この人たちっていい人って思えるのは私だけでしょうか」

「……」

実は浩子も気になっていたことである。隼人は別として、それ以外の人物の人質の接し方は普通の誘拐犯とは思えぬものだった。特に人質と犯人が一緒に風呂へ入るなど考えられるだろうか。

彼らは本当に自分たちを殺す気なのだろうか？ 最初から乱暴する気があまり無いように思えた。しかし彼らは誘拐犯である、時間が経つに連れて凶暴化する可能性も無くはない。

「そうなんですよね……」

浩子の思念を遮るように、浩子の左隣の女の子 おおし なおこ 大西直子が口を

開いた。二人よりも背が低くてサラサラの長い黒髪を持つ彼女は、

野党第一党である民進党の党首の孫に当たる。

「特にあなたたち二人が来てか態度が穏やかになっていったんです。岡部一家はあたしが来たときからすごく優しく……」

「人質が全員揃って、要求も言えたからひとまず安心できたんじゃない」

「一番妥当な考えだろう、浩子は思った。二人もそれで納得したよ
うだ。」

第五話 反応

午前零時を過ぎた頃、総理官邸に多数の人が集まっていた。

上杉景正の呼びかけにより、今回の事件の被害者・警察上層部・閣僚を集め、緊急対策会議を開くことになったからである。

報道陣は中に入るのを止められ、外で中継をしながら会社と連絡を取りながら会議の結果を待っていた。

「こちらです」

色部が車から降りた田原夫妻を迎えた。何事だと報道陣がマイク片手に走るが、その前に色部は夫婦をさっさと官邸へ入れた。

「由起子……」

廊下を歩きながら貴男がつぶやいた。

「俺が『少年法を守れ』とか言っていたから明美はさらわれたのかな……」

「……」

昨年から凶悪化する少年犯罪に対し、少年法を改正しようかという動きが国会の中で現れていた。それに対し少年犯罪を主に扱っている弁護士たちは、「少年法を守る会」を結成し、改正反対を政党・国会に訴えてきた。結局少年法改正の件は彼らの行動と各党の意見不一致で立ち消えとなってしまった。その「守る会」のメンバーの中に田原貴男がいたのである。

貴男の問いに由起子は肯定も否定もしなかった。ただ「自分が『守る会』の代表とみなされてしまったからだ」という認識が、夫婦の、そして娘・明美の中にあつた。

田原夫婦が入って間もなく、会議が始まった。それぞれがかつてきた電話の内容を述べるだけで具体的な対策についての話し合いはほとんど見られなかった。事件に対するシヨックの整理がつかず、いまのところどのように対応してよいかどこも十分に考えられな

つたためである。

景正はこの事件の情報把握が出来ただけでもよしとして、各党には改正に対する党内での議論を、警察には事件解決をお願いして最後に一言、

「なんとしても私は、あなたたちのお子さんや、お孫さんを救います」

と叫んだ。犯人に対しての対決姿勢を明確に示したのと、与野党の枠を超えての協力を呼びかけたのである。

各人が退室する中、田原夫婦は景正に近づき、

「よろしく願います」

と、景正の手を握り部屋を出た。

二人を見送った景正は、直江に

「党内の議論は今日から始めるよう各派閥に伝えてくれ」

そう指示して会見場に向かわせた。

直江が退室すると、部屋には景正一人だけとなった。

(浩子……)

家族をさらわれたのは景正も同じであった。景正は椅子に座ると急速に眠りへと落ちた。いちいち布団に入っている暇は無い。通常国会は、今日開会する。

「やはり田原夫婦を調べたほうかいいのでは……」

警視庁捜査一課、事件の対策本部が置かれたここは眠る暇すら許されなかった。

「しかし、単純に怨恨による犯行と受け取れるか……」

事件の対策会議が行われている。相手は総理の孫や各投手の家族を人質に法律改正を求めている。捜査しようにも規模が大きすぎてつかみ所が無いのだ。

ただ一つの突破口といえる点が田原夫婦である。政党関係者ではない彼らの娘をさらうメリットが無い。そこで「犯人は田原夫婦に恨みを持つ者ではないか」という意見が出たのだ。

「確かに田原夫婦が狙われるのはおかしい」

捜査一課課長の神取喜明かんとり よしあきが二人の写真を見て指で弾いた。

「田原は『少年法を守る会』の代表ではない。あの犯人が会を抑えるなら代表の家族をさらうはずだ。それに犯人は田原にも『守る会』にも具体的な要求をしていない……」

「では田原夫婦の身辺調査をしましょうか」

一課に配属されて間もない刑事が気合とともに机に乗り出した。

「そうだな、それしかないだろう。今できるところを全力でやろう
いつせいに各人が動き出した。神取は窓の外を流れる車の列を見て
呟いた。

「俺の『長年の勤』が今回も当たるか」

夜が明けた。各テレビ局は朝からこの事件のニュースで持ちきり
だった。どこその犯罪学者を呼んでは「これは快楽犯だ」とか、「
国家テロ組織だ」と言わせていたり、昨日の記者会見等の映像を繰
り返し流しているところもあった。

(この人が国家テロねえ……)

昨日のすっかりした彼女とは違って変わってボーっとした表情で
コーヒーをすする里美。頭の寝癖も、肩までずれたパジャマも直そ
うとしない。こんな里美を真面目腐った顔で「国家テロです。」と
言っている犯罪学者がおかしく見える。

(朝の弱いテロリストもいるか……)

「ふぁ、おはよう」

不意に里美が振り向いた。パジャマの乱れも直そうともしない。

「おはようございます」

浩子はつい「それでもテロリストなの？」叫びそうになった。

「……そのパジャマなんかならないのですか？」

浩子はせめてパジャマだけでも注意しようと思った。

「ああ、これ？女同士だからいいじゃない」

もういいと、浩子は彼女の隣に座ってともにテレビを見る。

「おはようございます!」

二人よりも元気な声で明美が入ってきた。この三人の様子を当然知らないテレビのおじさんたちは相変わらず勝手なことを言っていた。

「これは国家に対する犯罪です。あどけない少年少女たちを危険な目に合わせるなど、卑劣な行為です! テロです!! 我々は断じて彼らのような人間を許してはいけません!!!」

第六話 安すぎた夕食

国会初日は何事も無く終わった。誰もこの事件に触れたくはないのか議題は今年度の予算案についてだった。しかし水面下では、改正案についての動きが始まっていた。答弁を聞かずに近くの議員に話しかける、携帯電話で外部と連絡を取る議員が多く見られた。そして閉会のベルが鳴るや、皆逃げるように議場より姿を消したのである。

社労党の党首、安藤陽子あんどう ようこはその中でも落ち着いているほうだった。赤絨毯を駆け抜ける他の議員を避けるように端を歩いていた彼女は、一人の社労党議員に呼び止められた。

「このたびはどうも……」

頭を下げる議員に彼女も会釈をした。彼女は党首であるゆえに一人娘をさらわれていた。

「永井先生からの伝言です」

永井先生 ながい ひでお 永井秀雄は社労党の幹事長である。声をかけた議員は彼の取り巻きだ。

「娘さんをさらわれた君には悪いが、我が党は人権を守る党だ。だから我が党は犯人の要求に屈することは絶対に許されない。という事です」

「先生はそう言っていましたか」

次の言葉からはこの議員のオリジナルな発言である。

「政治家である以上、君も娘さんにも覚悟はあるはずだ」

陽子何か言おうとしたが彼はそれを制し、自分が永井であるかのように語り始めた。

「おそらく民自党と、民進党は改正に動くだろう。去年から一部の議員が改正の必要性を訴えていたからな、その中で我が党が反対を貫けば……。次の選挙で人権派の票が取れる」

「そちらの関心事はこの時でも選挙のことですか」

陽子は（永井のように思えるが、実はこの議員に）呆れたように言う。

「この国は議員の数が多いほうが理想を掴める。そういうことだ。君も娘さんも、そのためには……」

「犠牲になつてもらう」と言おうとしたが、さすがに気まずくなつたのか、「わかるだろう」と去っていった。陽子には十分言わんとしていることが理解できた。

「各派閥の幹部たちを官邸に集めてくれ」

景正は集まつた記者団にも目もくれずに干坂に命じると、

「聞いたとおりだ」

と記者に一言告げて車に乗った。

官邸での会議が始まつたのは午後七時ごろである。夕食時ということもあり、景正は自分のお金で弁当を用意した。並みの幕の内弁当で、値段は千円といったところか。

「なんだ、これか近くの料亭で酒でも飲みながらと思っていたのだがな、君は節約家だね。」

冗談のつもりなのだろうか、前総理大臣の畠山義輝はたけやまよしひろがニヤニヤしながら席に座る。景正はわずかに口元をゆるませただけだった。

（こんなときに料亭もくそもあつたものか！）

彼が弁当を用意したのは、そんな人たちに対するせめてもの心づくしであつたといえよう。

やがて他の議員も着席し、会議が始まつた。

「しかし、困つたことになつた」

誰かがありきたりのセリフをはく。

「君、まさか犯人の要求を呑むつもりではないだろうね」

割り箸で指された景正は冷静に答える。

「毛頭、そのつもりはございません」

「しかし、無碍に断つてしまつのはどうでしょう。この際少年法を改正しては」

直江の提案に一同は騒ぎ出した。

「それでは犯人の要求に応じるということではないか！ そんなことをしたら諸外国の笑いものだ」

畠山は口の中の飯を気にせずにかぶ。

「何も犯人の要求に従うというわけではありません」

「なんだって？」

「犯人が示した四つの要求を全て改正案から省きます。そうすれば我々が望んだとおりの法案となる。改正の動きを見せれば犯人は人質に手を出さないでしょう。一つの法律が成立するには時間がかかる。犯人もそれを理解して長い時間を与えてくれた。もちろん、その間に事件を解決させるのです」

「すでに全国規模で捜査体制を敷き、事件解決に向けて全力を尽くしています」

直江に続いて景正が話す。他の議員が質問をする。

「もし事件が解決できなかったらどうする？ 君の言うとおり犯人の要求を改正案に入れないとはいえ犯人に屈したことにならないかね」

「それは大丈夫でしょう、昨年少年法改正の話が出たとき、一部の議員が独自の改正案を作成したと聞いております。事件解決後このことを公表して、我が党が前から改正に賛成したことをアピールするのです」

直江の言葉にその議員は安心したが、

「そんなことでは諸外国になめられる！ 断固たる姿勢だ、『改正』の『か』の字も出してはならぬ」

また畠山が飯を飛ばす。

「私は官房長官の意見に賛成です」

幹事長の安田誠やすだ まことが口を開き全員の顔を見回す。

畠山は安田の顔を恨めしそうに見ていたが、やがて黙々と弁当をつつき、発言することは無かった。

安田は若手議員で結成された派閥「維新会いしんかい」の実力者であり、上

杉内閣成立に大きく貢献した人物である。

その安田が賛成を表明したことにより、景正を支える議員たちは皆同意した。畠山支持の議員たちは彼と同じく沈黙した。中には同意しようとした途端、畠山の顔を見るなりあわてて恐縮するものもいた。

(結局は数の多いものが勝ちか……)

景正・畠山それぞれが同時に同じ事を思った。

事件の話はそれで終わり、あとはただの食事会となったが、さあ解散というときに、ある長老議員が

「いつそのこと君は責任を取って退陣したらどうだ。新しい内閣が出来れば犯人も拍子抜けするだろう」

と、名案でも思いついたという自信満々の笑みで景正の肩を叩いた。景正は口元をゆるませることは無く、冷静に

「仮にあなたが総理になつたら、あなたの家族がさらわれるでしょうね」

長老の顔が引きつり、彼はあたふたと部屋を出て行った。“あの犯人たちなら出来ないことではないだろう。”

景正は長老の背中を見送りながら、虚しさを感じていた。長老は景正を支持する側の人間である。支持者でも平気でそういうことを言う。

(これが我が党の伝統だ……)

「幹事長、官邸はどうでした？」

安田が自身の事務所へと向かう車の中で、一人の若手議員と話している。

「『犯人の要求には従わないが少年法は改正する』さすがは官房長官だ。犯人と内閣、どちらの顔も立てるつもりでいる」

「それでは我々の思い通り少年法は改正となりますか？」

直江の言った「改正案を作った一部の若手議員」は彼らのことである。しかし安田の指示で極秘裏に進められたため、党内ですら「

若手の誰か」という認識で、事実を知るものは少ない。しかし直江はそれが誰であるか分かっていた。安田が「さすがは官房長官」と言った理由の一つである。

「いや、あくまでも犯人が捕まるまでの時間稼ぎだろう。改正すれば犯人の脅しに屈したことになる。日本の警察は馬鹿ではない。三月三十一日までに事件は解決するだろう」

「上杉総理も官房長官も慎重派ですからね……」

議員は窓の外を見た。ビルの合間に官邸が僅かながら見える。

「おそらく総理と官房長官はこの事件の後辞任するだろう」

えっ？ と議員が安田を見る。

「この国始まって以来の重大事件だ。解決しても責任は取らされる。その後任は誰になると思う？」

「やはり総理を支持する側の人間ですか？」

「畠山前総理や長老たちはこの国より自分たちのことしか考えないやつらだ。あの総理がそんな人間や自分に反対する者に総理を任せられるわけがないだろう。だから今のうちに積極的に総理を支持する側にまわれば……」

安田は通り過ぎる国会議事堂を見つめている。

「すると、幹事長は……！」

「総理も官房長官も優秀な人だ。しかし、残念ながら今回で表舞台から姿を消す。二人の政策を維新会が受け継ぎ、やがて我々の理想とする政策を達成させるのだ」

安田は議事堂が車窓の景色から消えるまで、それを視線から離さなかった。

「直江君、ご苦労だった」

官邸の廊下で、景正は直江に頭を下げた。

「何を言つか、俺とお前の仲ではないか」

「しかし、これで私だけではなく、君まで長老たちに目をつけられてしまう……」

初当選から三十五年、二人は年も選挙区も近いことから互いに打ち解けあつた仲である。

総理に就任した時、景正が各派閥を歩き回り、直江の官房長官就任をお願いしたのも、

(彼ならば自分についてきてくれる)

という信頼と友情あつてものであり、事実かれはその信頼に応えている。

「なあ、直江……」

景正がつぶやきに似た声を出す。

「私はこの事件が終わつたら退陣だろうな……」

直江は否定をしない。ほぼ確定事項だと思つている。

「今はその話をするな、長老たちに付け込まれる。事件が解決したらゆつくりと話を聞こうじゃないか」

初めて弱気な姿勢を見せる景正に励ます直江だったが、おそらく自分も責任を取らされるだろうと思つた。いや、彼と一緒に取ろうと思つた。

「さて、記者たちが会見場でニュースに飢えている。ありきたりな内容だが、我慢してもらおうか」

と、直江は歩きを速めた。

景正は直江を見ながら心の中で詫びた。そして執務室に入ると椅子に座り目を閉じた。僅かな余暇を睡眠に使いたかつた。

第七話 遺影

事件三日目、浩子は昨日と同じような朝を迎えた。相変わらず里美はソファアールでぐったりしている。浩子はそれにかまわず隣に座ってテレビを見ていた。直江官房長官の昨日の会見がVTRで流れていた。

「少年法を改正するかしないかは、現在各党内で協議して前向きに検討する方針を固めよう」と……」

いつもの官房長官と違い、歯切れが悪い。

それを後ろで見ていた隼人が不意に電話をかけた。

「おう、俺だ。今どこにいるんだ」

どうやら他にも仲間がいるらしい。

「……そうか、じゃあ総理官邸へ電話をかけてくれないか。あいつらの尻を叩こうと思う」

浩子の目の前で、犯人の二回目の要求が始まるうとしていた。

その電話を受け取ったのは、捜査一課の刑事、つのだしんじゅいち角田良一であった。
「もしもし」

角田は相手の返事を聞くと、人差し指を一本立てて円を描いた。

犯人からだ、という合図である。課長の神取はそれをみて、「長くしろ」と小指で支持した。

「私は総理の秘書の色部です」

「色部」の名を騙ったのは、犯人が秘書の名前まで調べているかもしれないという用心のためである。

「そうか、じゃあいまから言うことを各マスコミや各政党に伝える
「はい、かしこまりました。お伺いいたします」

隼人の言葉に角田は出来るだけ電話を長引かせようと、相槌をいれたり、わざと丁寧に話したりした」

「各党は改正案が完成したら、それを公表してほしい。全文をマス

「コミに流せ。どうも改正はするが、あんたらの思い通りの法律ができるような気がしてならないんだ」

「はあ……」

「この電話の内容は今日の午後六時までにはニュースに流せ。……まあ前回同様それより早く報道されるだろうが……」

逆探知ができる。と角田は思った。犯人自ら必要ないことまで話しているからだ。

しかしここで念を入れてさらに長引かせて見ることにした。

「お嬢様は無事なのですか、元気な声を聞かせてください」

隼人は浩子を一瞬ちらりと見たが、

「面倒くさい」

と、電話を切った。

「もしもし、もしもし」

角田が叫んでも相手の返事は無い。

「逆探知されているんじゃないの」

浩子がソファーにもたれながら、隼人に聞いた。

「だろうな」

平気さ、とでも言いたそうに答える隼人。

浩子の忠告どおり、官邸に逆探知の結果を知らせる電話が入った。

「広島県広島市、市民球場の近くの公衆電話からです」

「よし、分かった」

神取は、広島県警へと電話を入れた。

三十分後、市民球場の周りがパトカーと警察官で埋め尽くされていた。その光景は、お城の天守閣から良く見える。

「一体何の騒ぎだ？」

「なんでも凶悪な誘拐犯が、この辺りにいるんだってよ」

「こわいねえ」

「ほんとだねえ」

観光客やガイドたちが、口々に怯えた表情で話している。その中

で、同じような表情をしながらも、内心は別のことを考えている男がいた。

(これで当分は捜査の目は広島に限られる)

彼こそ総理官邸へ電話をかけた男、後藤隆ごとう たかしである。

隼人は隆の携帯に電話をかけた。隆は自分の携帯にイヤホンをつけ、一方は自分の耳へ、もう一方は公衆電話の受話器に押し付けたのだ。

隼人の声は後藤の持ったイヤホンを経由して角田刑事の耳に入っただことになる。

(さてと、次はどこへ行こうかな)

金は十分ある。使い方に気をつければ日本一周だって出来る。

(その前にお好み焼きを食べよう)

広島のこと書かれているガイドブックを開くと彼は普通の旅人に戻った。堀の向こうでは、まだけたたましいサイレン音が鳴っている。

官邸から戻った神取と角田は一課の刑事より報告を受けていた。

「田原弁護士というのはなかなかのやり手ですね、刑事・民事共に勝訴率が高く、特にここ二、三年前から少年事件の裁判を担当し、結果少年たちに有利な判決が下っています」

「例えばどんなのがある？」

「一番有名なといえは、あれです、三年前の『三茶さんちやデパート爆破未遂事件』でしょうか」

「ああ、あれか。確か爆弾は処理できたが、代わりに警備員が刺されてしまったんだよね」

神取はそのとき捜査一課の刑事の一人として、現場にいた。

「そうですね、警備員が男子トイレで爆発物をしかけている少年を発見し、取り押さえようとしたところ胸を刺されてしまいました。直後に少年は他の警備員に取り押さえられましたが、刺された警備員は間もなく病院で……」

「私は被害者の顔は見なかったが、現場のトイレは血まみれでひどかったものだ」

たくさんの事件の現場に立ち会ったとはいえ、その事件現場は彼にとつて刺激が強すぎたようだ。神取の顔が少し青ざめている。

「逮捕された少年は、その後どうになりました」

「田原弁護士の弁護があつたおかげで『精神が薄弱しており、善悪の判断は問えない』ということで、一時的な精神病院の送致と保護観察処分になっています。たぶん今は自由に外を……」

角田の問いに刑事は少々悔しそうに答えた。

「おそらく田原弁護士はそのような事件を何件も解決しているんだろうな」

「そのとおりです」

「田原弁護士が今まで関わつた少年事件の被害者の現状を徹底的に洗い出してくれ。どんな小さな情報も見逃すな！ 角田、お前もそつちへ回れ」

「はいっ！」

刑事たちは勇ましく現場を飛び出していった。部屋には神取が残つた。

神取は三年前、その警備員の葬儀に出席したのを思い出していた。遺影はなぜか二つあつた。それは警備員の妻だった。彼の死を聞いた彼女は、放心状態となりふらふらと家を出たところを車に跳ねられたという。

残された遺族は三人とも、涙を流さず気丈に振舞っていた。その彼らの顔を神取は今でも覚えている。そして、今日この家族が思い出されたことを神取は偶然とは思っていない。

第八話 血痕

麻布署に一本の電話が入ったのは、その日の十二時を過ぎた頃であつた。かけてきたのはあるアパートの管理人である。

「二〇三号室の住人が、最近来ていない、彼女は無断欠勤するよ
うな子じゃない」というアルバイト先からの連絡を受けて、管理人は部屋へと向かった。

メーターは動かず、たまっている新聞から見てもここを出たのは約一週間前らしい。管理人が警察へ電話しようかと迷っていると、彼女の大学の友達から、彼女の行方を尋ねる電話が来たという。

「嫌な予感がするので調べてほしい」
と管理人は震える声で頼んだ。

「犯人は広島にいる」という情報が入っていたので、麻布署は誘拐事件の捜査員から二人を引き抜き、マンションへと向かわせた。車で五分か十分といったところにそのマンションはあつた。

「こちらです、刑事さん」
管理人に案内されてその部屋の前に立つ。メーターと新聞、どちらでも電話で聞いたとおりだ。

「では鍵を開けてください」
五十くらいの髪が薄い管理人は、震える手を抑ながら鍵を開けた。
「よし、行くぞ」

と、刑事が入ろうとしたが、
「ちよつ、ちよつと待つてください!」

管理人はいきなり頭を抱えて下へと走り去ってしまった。
「ドアを開けたら『ドカンッ!』」とでも思っているのでしょうか

……」

二十代の色黒の刑事が呆れた顔でドアノブをひねる。爆発など起るはずもなく、刑事たちは無事に部屋へと入ることが出来た。管理人はしばらくしてコソコソと後に続いた。

「高橋さん、これを見てください」
たかはし

色黒刑事が何かを見つけたようだ。高橋と呼ばれた中年太りした刑事が汗を拭き拭き色黒刑事の隣に座る。

「血……だな」

部屋のカーペットの一部が、血で赤く染まっていたのである。すでに乾いているところを見るとかなり時間が経過している。住人がいなくなったときにできたものらしい。

「ひ……ひえっ」

何だろうと興味ありげに見た管理人だが、腰を抜かした。高橋刑事はそれにかまわずベランダへと歩く。

「窓が、壊されているな……」

ちょうど鍵の辺りで、窓が円形に切り取られていた。

「高橋さん、これは強盗ですね」

「なにか分かったのか」

「寝室へ来て下さい」

床の血をまたぎ、高橋刑事は隣の寝室へと入った。

「こりゃ、ひどいな……」

寝室のタンス、クローゼットの類が全て荒らされていたのである。そのうえ中身は全部持っていかれたようだ。さらに調べが進むうち現金も貴重品も、彼女の身元を知るものも全て無いことが分かった。「しかし貴重品はともかく、服や下着まで盗んでどうするつもりなのでしょう」

空になったタンスの引き出しを見て、汗を拭きながら高橋刑事は何か思い出した。

「この部屋の住人は確か若い女性だったな」

「はい……」

「犯人は下着まで愛していたのだろう」

「ストーカーですか……」

寝室を出た色黒刑事は、床の血を見てため息をついた。失踪からすでに一週間、決して少なくない血の量を見るともう彼女はこの世

にいることはないであろう。

(嫌な時代だ……)

自分と同じ年頃かそれより若い女性が被害者の事件の捜査は気が滅入る。

「家族に連絡しないといかな」

高橋刑事が寝室を出てきた。そしてまだ腰を抜かしている管理人の前に座った。

「この部屋の住人の名前を確認したいのですが」

管理人は一度唾を大きく飲み込んで答えた。

「かつ……加藤里美さんに間違いありません」

表札には確かにマジックで『加藤里美』と書かれてある。

第九話 他者との溝

野党第一党の民進党では、朝から政策会議が開かれていた。参加者の大半が、改正（犯人の要求は除いての）には依存の無いということだった。

「改正に賛成というなら民進党は民進党で、独自に法案を作成・提出するべきだ」

政策会長の鵜野圭介うのけいすけが勢いよく切り出す。

「今こそ民自党と対決する好機。この改正法案で、我ら民進党がいかに国民への政策を考えているかを見せ付けるのだ」

賛成派はこの意見に同意したが、改正反対派は

「反対を表明することで、国民にアピールすべき」

と言葉を荒げる。その争いを、党首の大西敦志おおにしあつしは冷ややかに見ていた。

野党第一党として、政権与党に法案で対決しようとするのは分かる。与党に反対することで意見を国民に示すのも分かる。どちらも政権を狙う党としては当然の行いであろう。それは敦志にも理解できる。

（しかし、違う）

人質や犯人に対することは一言も出ていない。

「我が民進党としては、犯人に人質解放を呼びかけてみてはどうでしょう。メディアを通じて犯人を説得するのです」

会議が始まって、初めて敦志が出した意見である。

「やはり君は子供のことが心配かね」

話し合いの最中に水を差すな、と言わんばかりに鵜野が不機嫌になつた。

（所詮当事者でなければ気が楽ということか）

敦志は大きいため息をついた。鵜野はそれを黙殺し、自説を話し続けた。

「できれば与野党の隔たりなく互いに協力して、人質を無事に解放させ、この事件を解決したい。少年法の扱いについても協力してもらいたい」

今朝早く景正が電話で敦志に話した内容である。

敦志も同感であった。

(一番重要なのは人質の命ではないのか、人質を取って政府を脅す犯人たちへの対応ではないのか)

しかし、敦志の目の前にいる人たちはそのことに気づいているのか、いないのか、与野党の対決ばかりを強調している。

そこへ、犯人から二回目の電話が入ったということと、その内容が伝えられた。

「これで少年法を改正させるわけにはいかなかったな」

反対派の議員たちは、笑顔で鵜野に話しかける。

鵜野は全く悔しそうな顔をしない。開き直って、

「法律を改正させるかどうかの問題ではない。要は民自党とどう考え方が違いを国民にアピールするかだ」

そうだ、そうだ、と賛成派が囁し立てる。

これが今までと同じ国会ならば、政権交代を狙う党としては当然の行いであろう。

(しかし、なにもかも違う……)

と敦志は再びため息をついた。

犯人 隼人 の要求を受けて民自党の上杉景正総裁は、同じ

与党の公民党の、朝倉治夫あさくらはろふを官邸に呼んだ。

「体の具合はどうですか」

握手をしながら景正が、朝倉党首に話しかける。ともに孫娘をさらわれている。

「布団に入るたびに孫の顔が頭に浮かんで……、どうも寝不足です」
そう答える治夫の笑顔に疲れが見える。

「犯人は改正案を公表してほしいとのことですが……」

私の体のことはいいですが、と治夫から本題に入った。

「犯人は公表までの期限をしていないのでしょうか？」

「どうもそのようですね」

しばらく二人に無言の時間が訪れる。

木枯らしに叩きつけられた窓が、二人をせかすように激しく音を立てる。

「私は最悪の場合、犯人の要求どおりの改正もやむなしと思っています」

治夫が声を押し殺すようにして口を開いた。

「私もそう思います」

景正の声も低い。

「なにが起こっても人質の命を最優先にすべきだと思います。間違っていますか？」

治夫が激しく問いかけた。窓がさらに激しく音を立てる。

「間違っています」

景正が穏やかに答える。

「法律を改正しないうちに犯人が捕まるよう努力しましょう」

二人が両手を握り締め互いに協力を約束したときには風は収まっていた。

治夫が去った後、景正は窓の外を眺めていた。民自党の党本部が見える。

(公民党は党内の結束が強いと聞いているが……)

民自党は内部の争いが激しい。政権与党となつてから五十年、何人も総理大臣が、他党より内部の敵によつて倒されてきた。景正自身も内部の敵の一人となり、畠山を倒して総理となった。

今回の事件を聞いて、民自党内の議員の大半が事件を解決することよりも、この事件を利用して自身の栄達を考える。つまり景正の後の総理を狙って動いているものが多い。

同じ連立のパートナーとして公民党の結束の強さを羨ましく思う彼であったが、同時にこれを機にその結束が崩れやしないかと不安

に思った。不幸なことに景正その不安は当ってしまふ。風はまた激しく吹き始めていた。

「最悪の場合改正もやむなしとはどういうことですか！」

治夫が党本部に戻って間もなく、景正の会談の内容を聞いた真柄まがら健太けんたを代表とする若手議員のグループが彼の部屋に飛び込んだ。

「事件はまだ起きたばかりだというのに早くも改正を口にするとは！」

「我が党は、人権を護る党ではないですか」

「最近の公民党は民自党の言いなりになっています！」

治夫は席に勢いなく座ったまま、彼らの言葉に反応を示さなかつた。

「いくらお孫さんを人質に取られたとはいえ……、民自党と対等に遣り合おうとした連立結成時の党首はどこにいったのですか！」

真柄が治夫の机を激しく叩く、やっと治夫が首を上げた。

「確かに我が党は人権を護る党だ」

声は抑えているが、はつきりと力強く話す。

「今、私の孫を含めて六人の子供の人権が侵されようとしている」

「日本の人口から見てたつた六人だ、しかしその六人を救えないでなにがわが公民党だろうか、なにが政治家だろうか」

言葉を出すうちに、治夫の体に勢いが感じられてくる。

「たとえ私の人質が私の孫ではなくても同じことを言ったと思うよ」

真柄たちは彼の勢いに押されて、部屋を去った。しかし彼らは去り際になんとも割り切れない表情を見せた。

ドアが閉まる音と同時に、治夫の勢いは再び消えた。そして自分に問いかけた。

（本当に人質が他人であつても同じことが言えたか？）

彼はその問いかけに悩み続けることになる。

もう一つの『人権を護る』をウリにする党　社労党では、公民

党以上に対立が激しくなっていた。

「永井先生！！」

陽子が幹事長室の扉を激しく開けた。中には幹事長の永井他、数人の取り巻き議員がいた。

「党の会議に出席してください」

これより三十分前、党の政策を決める会議が始まっていたが、永井ら彼を支持する議員たちがボイコットをしたため、参加者は全体の半数を切っていた。

「どうせ話す内容は少年法の改正案作成だろ」

永井が面倒くさそうに陽子を睨む。

「そうです、我が党の独自の改正案を作成するのです」

「断る」

永井が視線をはずした。取り巻き議員はそれを見てニヤニヤしている。

「我が党は人権を護る党だ、少年の人権を侵す法改正など賛成できません。犯人の要求を丸呑みするなど言語道断」

「その通りです」

取り巻きが次々に相槌を入れる。

「人質の生命は護らないのですか？」

陽子が切り札と言うべき言葉を出した。しかし、

「君のその言葉は政治家としての発言かね」

鋭く永井に切り返された。陽子は答えに詰まる。

「今、君は母親として発言したのだから」

凶星であった。陽子の様子を見た取り巻きたちがさらにいやらしくにやけ出す。

「人間の欲望と本能は無くすことは出来ない。だが、人間全てが欲望と本能のままに生きたら争いとなる。その欲望と本能を抑えているから人間は人間なのだ。他の動物と違った存在になれたのだ」

それまでそっぽを向いていた永井だったが、陽子を真正面に座っている。

「その欲望と本能を抑えるのを助けるために、自らの欲望と本能を抑えながらも人間が楽しく安心に暮らせるための社会を作るのが政治家ではないかね」

「それが永井先生の政治家理念であることは存じております。私も素晴らしいものだと思います」

陽子がおどおどと応える。

「だからこそ政治家はなおさら欲望と本能を抑えなければならないのだ、家族も同様だ！政治家になった以上ある程度の行動の制約と意見に対する非難を自身も家族も受ける。それでも政治家としての判断をしなければならぬ、それが政治家だ。その覚悟が出来ずに政治家などやるんじゃない！！」

永井の激しい怒りに、陽子はもちろん周りの取り巻きも圧倒された。陽子は力なく退室した。その背中に

「さすがは先生」

「やはり女性には先生の崇高な理念など理解できないのですな」と言った永井への追従と彼女への非難が浴びせられた。

どの党もさらわれた者の家族と他者との溝は深い。

第十話 サイダー

事件は四日目の朝を迎えた。久々に降った雪が、山荘の周囲を白く覆っている。

いつものようにソファーにだらーっと横たわる里美の目が大きく見開き、素早く体を起こした。

「昨日の昼ごろ、東京都港区麻布で、『部屋の住人がいないようだ』との通報がありました」

「警察が部屋を搜索したところ、部屋には荒らされた跡と血痕が残されており、何者かが侵入した形跡があることから、この部屋の住人の女子大生、加藤里美さんが侵入した何者かにさらわれたものと見て、警察では今朝から公開捜査に踏み切り……」

これは隼人に知らせないと、とテレビを消して後ろを向くと、そこに浩子がいた。

「聞いていたの……」

里美の問いかけに浩子はこくん、と頷いた。

「そう……」

これは面倒なことになってしまった。と里美は思った。何日も山荘に立てこもっているので、いずれ搜索願は出されるものだと思悟していたが、こうなるとは……。

「あなた、誰なの!？」

里美の表情を読んだらしい。その顔には恐怖と怒りと不安が入り混じっている。

「あの血痕は誰のものなの？ 本物の里美さんの？ それとも……」

「そ、それは……」

浩子は目の前の里美を偽者と思っているようだ。

「ねえ、あなたは誰なの？ あの血は誰のものなの？」

浩子は里美を激しく責めるが、決して近づこうとはしない。

「目の前にいるのは本物の里美だ」

二人は同時に声をするほうを振り向いた。ぶ厚いジャンパーを身につけ、シャベルを持った隼人がいた。

「どうやら警察が勘違いをしているみたいだな。まあ……このことはいずればれることだし、いつかは話そうと思っていたが」

「じゃあ部屋の血は誰の？」

「まあ待て、こつちもいきなりだからな、そうだな……明日には必ず話す。あの部屋の件も、俺たちがなぜこの行動を起こしたかも……」

そう言つと、隼人は外へと出て行き、ロビーには再び浩子と里見だけになった。

「そ、そういうわけなので……」

里美はあたふたと階段を上っていった。

残された浩子は一人ソファに座り、テレビをつけた。前にも見た犯罪学者がいた。

「許せません！ 若い女性を狙うなんて、卑劣な行為です！！ 我々は断じてこの犯人の行動を許してはいけません！！！」

（雲って結構早く動くんだな）

と隼人は思った。最初はたわいも無い考えだった。新雪の上に足跡ではなく全身の跡をつけてやろうと思ひ、雪かきをすぐに中断して雪の上に仰向けに倒れこんだのだが、こうして雲を見ていると時間が経つのも気にならなくなる。

（そつえば前はよく仰向けに空を見ていたな）

大きな口を開けた雲を見ながら、隼人は昔の記憶を蘇らせていた。あれは今とは全く逆の、暑い夏だった。

「死んでいるの？」

「あほか、そんなわけがないだろ」

隼人がベンチから上体を起こすと、背中についた埃を払いながら声の主を見た。隼人の彼女である加藤彩子^{かとう あやこ}である。妹の里美より背

が高く、顔も体も大人っぽい。髪は里美より少し長めである。ちなみに朝は強い。

「いやー、あたしはてつきり隼人がこの暑さにやられたものだと思つてさ」

「そのわりには冷静であること」

「うっ……。まあそんなことは置いといて、そんな君にははい、サイダー。喉が渴いているでしょ。」

さすがに彼氏である隼人の大好物は心得ている。小学四年生の時からの付き合いいえばそれも当然か。

「どうも」

二人は遠くに見えるビル街を見ながらジュースを飲んだ。

「お金が無いときはこういうデートもいいものだねえ」

「東京のど真ん中にこういうところがあるとは思ってなかったからな」

「日比谷公園か……。公会堂の近くに行けばタダでコンサートも聴けるし、おいしい場所だねえ」

二人とも昨年の春に大学進学のために故郷から上京し、共に一人暮らし。妹の里美もこの春二人と同じ大学に合格し、一人暮らしを始めている。

「ねえ、隼人。この地図見て」

公園を出たところで、不意に彩子が叫んだ。

「国会議事堂がこんなに近くににあるよ」

確かにこの公園の周辺には、警視庁や国会議事堂、首相官邸などこの国の中心にあるべき建物が揃っている。

「ああ、そうだな」

「地図を見る限りでは歩けない距離ではない。あの方向ね、よし行こう」

空き缶をゴミ箱に勢いよく捨てると、彩子は走り出した。

「行ってどうするんだよ！」

「政治家さんたちや総理大臣がいるかもしれないじゃん、手を振っ

たら応えてくれるかも」

まるで芸能人を見に行くみたいだな、と隼人は彩子の後を追った。八月の暑い日の話である。

ドサリ

顔に何かがかかり、隼人は現在へと引き戻された。

「冷てえっ」

顔の雪を払い、上体を起こすとシャベルを持った里美が申し訳なさそうに立っていた。

「…何やってるんだ」

「凍死したのかと思って……。あ、でも本当は足にかけようとしたんだよ」

やっぱり姉妹だなと思いつつ、隼人は再び仰向けに寝た。

「隼人こそそこで何やってるのよ。雪かきしてるんじゃないの？」

そうだった、と隼人は飛び上がった。後ろを向くと、あまり綺麗ではない人型が雪の上に残されていた。

「人が寝たらどんな跡が出来るのかと思ってな」

「そんなことをしたら風邪をひくでしょ」

と言ったそばから里美はごろん、と雪の上に仰向けになった。

「……おい」

「あたしは今来たばかりだから」

隼人は里美のそばに腰を下ろした。風邪の音も雑音も、雪がかき消してくれる。雪の上に寝ると、それが一層感じられる。

「今年ももう二月か……」

「ああ」

「もうすぐ二年になるね」

「……」

二人をしばらく暗い沈黙が支配した。

「ねえ……。あの子に全部話すの？」

里美がその沈黙を破った。

「それは分らない……。ただ、彼女は俺たちの話を理解してくれると思う。それに……」

「それに？」

「もう一人話す人間がいる。話すなら二人同時に」

「明美ちゃんね」

里美が即答すると隼人は頷き、

「そうでなきゃ彼女をさらった意味が無い」

山荘のほうから二人を呼ぶ声がした。声のほうを向くと、岡部夫婦が困った顔をしている。

「雪をどかしてくれるんじゃないかったのか」

「あつ……」

二人はやつと自分たちの仕事を思い出した。町まで車で食料を買出しに行く夫婦のために、庭から近くの林道までの雪をどかさなければいけないのだ。

その後、二人が大急ぎで作業を始めたのは言うまでもない。岡部夫婦も手伝い、車が山荘を出発したのはそれから四十分後であった。車が林道へ出たのを見ると、二人は雪の上に倒れこんだ。

「これ、明日に響くかな……」

そう言ったのは、里美である。

「まだそんな年じゃないだろう」

明日に響いてたまるか、と隼人はすぐに立って、山荘へと歩き出した。

「だってあたし、二十歳だよ」

里美はしばらく雪の上に寝ているようだ。

「はいはい」

適当にあしらって中へ入ろうとした隼人だったが、不意に森の奥の一点を見つめてつぶやいた。

「確か……、あの辺りだったよな」

第十一話 カップル失踪

麻布署では、里美の部屋の事件の捜査が続いている。この日、署の会議室には『麻布女子大生失踪事件捜査本部』という貼り紙が貼られた。

「あのアパートは防音がよく効いていて、隣や上下の部屋の住人の言うには、彼女の部屋から物音は全く聞こえないというのです」

「そうか」

深夜とはいえ、誰か証言者がいるだろうと期待していた高橋刑事は肩を落とした。

「ただ……、これは事件に関係しているかどうかは分かりませんが、近所の主婦が夜中の三時ごろ事件現場付近を猛スピードで走る車を見たそうです。乗っていたのはどうも二人のようだったと」

「きっとそれですよ、高橋さん。捜査の手がかりは無くなったわけではありません」

色黒刑事が高橋刑事を元氣付ける。その時、一人の刑事が部屋に飛び込んできた。

「部屋に残っていた血痕の血液型と、部屋の住人加藤里美さんの血液型が一致しました！」

「そうか……」

高橋刑事はまたもや肩を落とした。今度は色黒刑事も隣で落ち込んでいる。その姿勢のまま、高橋刑事は彼女の交友関係について聞いた。

「広いですね。人に恨みを買われるということも無かったようです。ただ、今年に入って『変な人に付きまとわれている』と大学の友人に語っています。彼氏と二人でその事でかなり悩んでいたようです」

「やっぱり……」

高橋刑事の事件現場での予想が見事に的中してしまった。色黒刑事の落胆は一層激しくなった。

「彼氏から……話は聞けたのか？」

「それがですね……高橋さん」

よくぞ聞いてくれたとばかりに、その刑事は大きく身を乗り出した。

「アパートの管理人の立会いのもと、家に入りましたが、それが……金品・貴金属の類はもとより、衣類・身分を証明するもの。その全てが無くなっていたのです」

「それでは彼女の家と同じ……！」

啞然とする高橋刑事。さらに彼らの驚きの報告が続く。

「それが大いに違うのです。彼の部屋は全く荒らされていません。血痕も、争った跡も、侵入された形跡も無いのです」

「まるで夜逃げのよう……と言いたいですね。電化製品や家具は残されているのですが。」

「その彼氏の名前はなんと言う」

別に聞いてみたところで何かの発見を期待しているわけでもないが、とりあえず、高橋刑事は聞いてみた。

「藤田隼人、二十二歳。加藤里美と同じ大学の四年生です」

さつきより冷静に刑事は答えた。

その五時間後。高橋刑事は隼人の家にいた。「捜査に詰まったらもう一度現場に戻れ」という言葉を思い出し、先に里美の家に向かったが、目新しい証拠は何も発見できなかった。

せめてここに何かがあれば……、と汗を拭き拭き隼人の家に来たが、先ほどの報告どおりだった。

「取りあえず、二人についての周辺調査と家の周囲で証言者や目撃者探しを続けるしかないか」

高橋刑事はそういうと車に乗り、ため息をついた。そして汗を拭きながら自分の服を見て思った。

(そういえば二日も帰ってなかったな……)

二月だからそんなに汗臭くもないだろう。と彼は今日も帰らない

決意をすると、運転席の色黒刑事に出発を促した。

ちょうどその時、隼人のアパートの前に一台の車が止まった。高橋刑事は色黒刑事に声をかけると、車を降りてその車に近づく。

「高橋じゃないか」

不意にその車にいた男から声をかけられ驚いた高橋刑事だったが、男の顔を見ると

「なんだ岡田おかたじゃないか」

と、警視庁にいる友人に笑顔を見せた。

「本庁の事件に何か進展があつたのか」

岡田刑事は車を降りると、隼人の部屋を指差した。

「事件の被害者である田原弁護士が過去に受け持った事件の関係者に話を聞こうと思つてきたんだ」

「おい……本当のあの部屋の住人か？」

「ああ、そうだ。どの部屋かは知らないが名前は藤田隼人という」

岡田刑事が隼人の部屋を指したのはただの偶然だったようだ。

「彼ならいないよ」

「なぜお前がそれを知っている」

高橋刑事は汗を拭きながら岡田刑事にこれまでのいきさつを話した。岡田刑事も自分の知っている情報を全て伝えた。

「なあ岡田、誘拐事件と女子大生の失踪、そしてその彼氏の失踪。

この三つの事件は何か関係しているのかなあ……」

岡田刑事は腕組みをしてじつと考えていたが、何かを確信したかのように、

「高橋、本庁に来てお前の口から今までのことを話してくれないか」と言つて、車のドアを開けた。高橋刑事は勢いよく乗り込む。

「お前は署に戻つてこのことを伝える」

と色黒刑事に叫んだ。

二台の車は同時に隼人の家を離れた。

第十二話 バレンタインデー

二月三日。約束の朝が来た。

「今日は珍しく目覚めがいいな」

隼人はロビーでテレビを見ている里美に声をかけた。今日の里美は普段とは違い、深刻な顔をしている。

「あの……」

明美がいつもと違う雰囲気を感じたのか、おどおどしながら二人に話しかけた。

「何か話があるって……」

「ああ、話す相手はもう一人いるからそこに座って待って……」

「もういるわよ」

隼人の言葉を遮るかのように、浩子がロビーに現れた。

「よし、俺の部屋に来い」

隼人の部屋は浩子の想像よりは広くはなかった。浩子と明美は彼のベットに座った。

「話してくれるんでしょ。私たちをなぜさらったのか、なぜ少年法を改正させたいのか」

浩子が聞くと、隼人は頭を掻きながら。

「一応そのつもりだ」

「一応？」

浩子は隼人を鋭く睨む。

「かなり長い話だ。昨日お前が疑問に持ったあの血痕の一件も話す。お前が納得できるかどうかは分からない」

「構わないわ」

「先輩……、血痕ってなんのことですか？」

明美が小声で浩子に尋ねた。昨日のニュースを知らないのは、この部屋では明美だけである。

「ちょっとお嬢さんには刺激の強い話かもしれないな……」

「いいわ、話して」

「私も、大丈夫です」

浩子と明美がそう言うのと、隼人は大きく息を吸って語りだした。それは事件発生の五日前、つまり浩子と明美がさらわれる五日前にさかのぼる。

「服は出さないのか？」

時計は十二時を指しているのに、里美はまだ準備の一つもしていない。全く、明日は朝早く起きてアジトに向かうというのに……。

「うーん、ごめんね隼人。あたしもう寝るわ……。服を出すのは起きてから、だから目覚まし時計早めにセットしておいて」

起きたばかりの里美もそうだが、眠くなった里美もたちが悪い。

里美はそういうと、そのまま寝室へと行ってしまった。

結局俺がすることになるんだろうな……。とと思ってしばらくテレビを見ていたが、俺も寝ようと思って寝室へと入った。里美の奴もう寝息を立ててやがる。俺は里美を横目に見ながら、隣にあった布団に寝転がった。

そして俺は昔の夢を見た。

「また寝てるー！」

いきなり大声で言われたので、目を覚ますと両手に缶ジュースを持った彩子が隼人を覗き込むようにして立っていた。

「あんたは本当に外で寝るの好きね。」

「いや、別にそういうわけでは……」

「あたしは外で寝るなんてとても出来ないわ。特にそういうベンチ、木が硬くて硬くて……もうっ！ まっ、そんなことは置いといてそんな君にははい、熱い紅茶」

「はい、どうも」

夏にこの場所を発見して以来、二人は時々ここをデートに利用し

ていた。季節はもう冬である。年明け早々後期レポートの提出やテストが二人を悩ましていたが、今はその地獄から解放され、暇を見つけてはいつも二人で会っていた。

「しかし、こういう所でのんびりしていると、周りの一生懸命働いてる皆さんに申し訳ない気がするねえ」

「うーん」

猫舌な彩子はちびちびと紅茶を飲んでいる。隼人は熱いものを気にせず、豪快に飲み干した。

彩子の言うとおり、この公園はビルに囲まれている。公園の周りの道も車が多く通り、歩く人も携帯電話を片手に話すサラリーマンばかりだ。

きつと自分たち以外の人は皆働いているんだろう。そう思うと、隼人も少々申し訳ない気がしてきた。

「ちよつと歩こうか」

飲みかけの缶をゆらゆら揺らしながら、彩子は歩き出した。隼人は近くのゴミ箱へ缶を投げ、それがちゃんと入ったのを見届けると、後を追った。

彩子は警視庁の前で止まった。そして彼女はその建物を見上げた。周囲は車が何台も激しいエンジン音を上げて通り過ぎていく。そんなことに構わず、彼女は警視庁を見続ける。何か考え事をしているのだろうか、隼人もつられて見上げる。

入り口を守る警官はそんな二人をのんびりと見つめている。

しばらくして、

「おーいー!!」

と彩子が警視庁に向かって叫び手を振った。

「誰かいませんかー!」

「な、なにやってんだよ」

隼人は彩子を止めると警官にあやまった。初老を迎えているその警官は少し戸惑った表情をしながらも隼人に応えた。

「だって警視庁だよ、警視庁。数々の難事件を解決した有名な刑事

さんがいるかもしれないんですよ」

「そんなドラマのような人物いるわけがないだろう！」

とそう彩子をたしなめる隼人だったが、はっと気がつくと言先ほどの警官の方を振り向き再び謝罪。

警官はちよつと苦笑しているようだった。

「ほら、もう行くぞ」

隼人は彩子の手を引っ張ると、もう一度警官に謝って、その場を離れた。

「いいのか、全部お前のおごりで」

帰りの電車に揺られながら、隼人は前に座っている彩子に尋ねる。「いいの、今日はバレンタイン・デーでしょう、これくらいのことじゃないとね」

彩子にそう言われて隼人は初めて今日が二月十四日であることに気がついた。そして、道理でいつもより彼女のテンションが高いと思っただ。

「ま、一月後を期待しているけどね」

彩子はニコニコしながら隼人の顔を見る。

(こいつはかなりのお返しを期待してるな)

と隼人が覚悟を決めたとき、電車は白金高輪駅しろかねたかなわへと着いた。

「んじゃ、また電話する」

隼人が手を小さく振って電車を降りると、

「ちよつと待ったー！」

彩子が大急ぎで隼人の後を追う。間一髪彩子が電車を降りた後、ドアは閉まった。

「どうしたんだ、一体」

不思議そうに隼人が尋ねると、彩子はバックの中から一つの包みを取り出した。

「いや、やっぱりこれがなくちゃバレンタインとは言えないですよ。そんな君にははい、手作りチョコ」

「あつ……、ありがとう……」

ニコニコと笑顔の彩子。この表情から一月後のお返しは高レベルなものを必要としている。

(こ……これは何か対策を考えないと……。菓子作りでも学んで手作りクッキーにでもするかな)

そうすれば、幾分安く済む。

「あつ、もう電車が来る」

次の武蔵小杉むさしこさぎ行きの電車がホームに入ってきた。彼女はこの電車で目黒めくろまで行く。

「今日は本当にありがとな」

「いって、こっちも楽しかったし」

閉まるドアの向こうで、彩子が「バイバイ」と手を振る。隼人はそれに応える。やがて電車は動き出し暗い闇へと姿を消す。

彩子はいつもどおりずっと手を振り続けていた。

それが最期だった。

第十三話 殺人

ゆっくりと俺はまぶたを開けた。時計を見る、起きるのにはまだ早い。久しぶりにこの夢を見た。そして、ここで終わってくれたよかった。

そんなことを考えている俺の脳裏に、一瞬里美が泣きながら俺に飛びついてきた。

(いけない、またこの続きを思い出してしまう。せつかくここで目覚めたというのに……)

不意に隣の部屋で小さな物音がした。俺はさっきの夢から逃れなくて物音の正体を探ることに決め、寝室を出ようとドアの前に立った。

「そこに……、いるんだね」

聞きなれない男の声がして、俺は一瞬戸惑ったが、すぐに思い出した。

(こいつがストーカーか?)

今年に入り里美から変な手紙や小包が届いて気持ちが悪い、との相談を俺は受けていたのだ。男が住んでいると思わせるために、俺は里美に自分のパンツをあげて以来、手紙は途絶えたと聞いていたが……。

そう考えているうちに、ドアノブから「カチャリ」という音がした。俺は意を決すると思い切りドアに体当たりした。

「ひいっ!」

情けない声を上げて奴は倒れた。俺はそいつに乗りかかると

「てめえか、里美をつけているのは」

と、奴の髪をつかんだ。

「ひいっ、許してください」

と、奴は泣き声を上げる。

「どつしたの？」

騒ぎに気づいた里美が部屋から出てきた。さすがにこういう時は目覚めがいい。

「ああつ、里美さん！ 助けてください」

「馬鹿野郎！！」

奴は馬鹿なことを口にしたので、俺は思いつきり髪を引っ張り上げた。

「こいつがお前に変な手紙を送っていたんだよ」

たぶん暗くて見えないだろうが、そいつの顔を里美に見せる。

「許してください！ 僕はただ……、あなたを独占したかっただけなのです！ 他の男と会話をするのが許せ……ふごっ！！」

奴の言葉の途中だったが、俺はそいつを殴った。奴が言った「僕はただ……」のセリフは、俺に俺の思考が飛ぶスイッチを作動させたのだ。

「お前は“ただ”で人を殺すのか？」

今にして思えば俺はこのとき笑顔だったと思う。そして次の瞬間にはまた殴っていた。

「ただ」で人を殺すだと？ 冗談じゃない、そんなことで殺されてたまるか、お前らは殺せたからいいと思っっているだろうが、殺された者や残された者の体や心の痛みを考えたことがないだろう、ないんだろっ！！

「僕はただ、人がどのようにして死んでいくか。それが見たかっただけです」

逮捕された十六歳の少年Aは、彩子を殺した動機について淡々と語り、さらに聞かれてもいないのに、殺害の状況について話し始めた。

「僕がナイフで胸を一突きにすると、彼女は最初は何がなんだか訳の分からない表情をしていました。やがて、口から血を流し、ひざ

から倒れ、涙をぼろぼろと流しながら、何かを……たぶん男の人の名前だったと思います。それをブツブツブツつぶやきながら死んでいきました」

彼の話にしばし呆然としていた刑事だったが、彼が一息ついたところ、

「それを見てお前はどう思った」

と質問した。彼はしばらく考えた後、

「なんか自分の思っていたのと違って……、期待はずれでした。残念です」

その顔には反省や後悔の念など微塵も感じられなかった。

「ただ人がどのようにして死ぬか？」だ？ そんなことで死んだ彩子の気持ちを考えたことがあるのか、何が期待はずれだ。俺らはためえの思い通りに生きなければならぬのか！？ 実験台か？

どうしても「人の死」がどういふものか、それが知りたければ自分でしろ。そうだ、自分で自分を殺せばいいのだ。誰もいないところで誰にも迷惑をかけずに死ねばいいのだ！！

そうそうすれば「人の死」というものが自ら体得できるだろう。こうしてこの世からイカレタ考えの持ち主が一人消える。お前にとっても世の中に人々にとってもどっちも得だ。

どうだ、素晴らしいアイデアだろう？ ナイスな考えだろう？

おい、何か言ってみろよ！ 俺の考えに何か言ってみろよ！！

「やめてーっ！！」

後ろから、里美の悲痛な叫びがして、俺は我に返った。次の瞬間、俺の右腕は里美の手がちりと抑えられた。

「うっ……うっ……」

後ろを振り返ると、里美は下を向いてただ泣くだけだ。再び前を向くと、暗くてよく見えないが、ストーカーがぐったりと倒れている。頭や顔から何かドロドロと流れている。

「おい……」

左手で揺すつてみたが反応がない。ためしに奴の腕を持ち上げて離してみた。腕は空中に留まることなく、パタンと床に落ちた。

改めてもう一度奴の腕を、今度は手首を中心に触れてみる。

脈がない。

「おい……」

俺は頬を何度叩くが反応はない。そのたびに俺の手は奴の血で汚れていく。

里美が手を離し、俺の背中に抱きついてきたので、俺は初めて自分の右手を確認できた。

指の関節を中心に奴の血が付いている。

（俺はこいつを殴り殺してしまった……）

俺の心が読めたのか、里美の泣き声がいつそう激しいものとなった。俺も自然と涙が流れていた。これで、どんなことがあっても彩子には二度と会えなくなってしまった。そう思った。

ふと顔を上げると制服を着た少年がベランダに立っていた。暗いのに顔がはつきりと見える。少年はニヤつきながら

「僕と同類だね。」

そう告げると、スーツと姿を消した。

俺はまだ捕まるわけにはいかなかった。泣いている里美を励まし、計画通りにアジトに行かなければならない。

俺は電気をつけた。そして奴の顔を見た。顔はボコボコで、赤黒い血がまだあふれ出していて、もう誰だか分からなかった。

手を洗うと、里美の荷造りの手伝いをした。いちいち丁寧に行っている暇はない。乱暴に服を取り出し、そして押し込んだ。

奴の死体は頭をスーパーの袋で何重に包み、寝袋に全身を入れて車へ入れた。全ての終わりを確認すると、俺は猛スピードで里見の部屋を後にした。

アジトに着いた時はもう朝の八時を過ぎていた。俺は里美をだけ

アジトへ向かわせた。俺はこの山のどこかに一人で穴を掘り、奴の死体を埋めた。里美に罪はない。俺一人がやったことだ。

そうだ、なぜ少年法を改正させるかだったな。改正によってイカレタガキどもを護るおかしな法律を無くすためだ。これによっておかしなガキどもは全て処刑される。彩子や彩子以外の殺された者や遺族の無念もこれで晴らせるというものだ。そして、俺たちと同じ悲しい無念な思いをする者は増えることはないだろう。

素晴らしい考えだとは思わないかね？

第十四話 剥奪

隼人は話を終えると、どこともなく空間を見つめた。先ほど話していたときの興奮がだんだんと薄れていく。

それにつれて、里美の表情も和らいできた。隼人がストーカー被害の状況を話していたときは、今にも誰かに殴りかかりそうな勢いだったので、すぐ後ろについていたのだが杞憂に終わったようだ。

浩子は隼人の話を終始黙って聞いていた。明美は以外にも落ち着いていた。彼女にとって少し刺激の強い話かと思っていたのだが、隼人の話に飲み込まれてしまったようだ。

しばしの間沈黙が続いた。浩子がそれを破った。

「犯罪少年を厳罰に処すために少年法を改正する。そのために私たちをさらったのね」

「そうさ」

隼人の焦点が空間から浩子へと変わった。

「私たち政党のトップの身内を人質にすればどの党も言う事を聞く、そう思っただんでしょ」

「ああ、どの党も政治家も国民より自分のほうが大切みたいだからな。自分の問題にしてあげたんだよ」

「じゃあ、なぜ……」

そう言うと浩子は明美を一瞬ちらりと見た。

「どうして明美ちゃんがここにいるの？ 彼女のお父さんは政治家じゃないじゃない!!」

「その通りだ。彼女のお父さんは政治家じゃなくて弁護士だ。だからさ」

浩子は隼人の言葉が理解できず、戸惑っている。

「勘が鈍いなお嬢さん」

隼人はしょうがないか、との表情で話そうとしたが、

「お父さんが弁護士だったからでしょ」

と明美に遮られた。

「お父さんが彩子さんを殺した少年の弁護士だったからでしょ。そして少年は軽い刑ですんだ……」

検察側は少年の犯行を悪質な通り魔的快樂殺人であり、少年でも許されぬとして、懲役十年を求刑した。（それでもこの量刑は隼人や里美の望む刑とはかなりの開きがある。）

しかし、彼に与えられた判決は医療少年院送致であった。田原弁護士によつて、精神病患者と認められたようだが詳細な理由は隼人はもちろん、両親・検察すら知る事はなかった。

判決を知つた両親は「せめてあいつの顔を見られれば……」と、裁判を傍聴できなかつた事を悔やんだという。

「それだけじゃないさ」

明美はこくと頷いた。

「他の仲間の人もあなたと同じような目にあつて……。それでお父さんが犯人の弁護士になつた……」

「ああ、そうさ。すべてお前の親父がしたことだ」

隼人に再び興奮が舞い降りた。

「なぜどいつもこいつも軽い罰なんだ！ 少年だからか、少年の未来を守るためか？ 彩子はその未来を奪われたんだ。お前らのように友達と遊んだり、好きな物を食つたり、将来の自分を思い描いたり……。そんな権利を奪われたんだぞ」

「この世を楽しく生きる権利を奪われたんだぞ！ あいつが一体何をしたんだ？ この社会に何か迷惑をかけたか！？」

隼人は浩子たちに問いかけるように顔を見たが、考える間を与えず再び叫んだ。

「あるわけないだろう！ なあ、里美。しかしあいつは罰を受けてしまった。殺した相手は社会に迷惑をかけたあいつは軽い罰でこのうとしている。なぜだ！？」

浩子は隼人が一瞬笑つたような気がした。

「俺には分からないなあ……。どんなに考えても、ただ一つこうか
なつてことは、結局他人は俺たちの気持ちなんか分かってないって
ことなんだろうなあ……」

とここまで言い終えて少しうつむいた隼人だったが、次の瞬間明
美を睨みつけて近づいた。

「……そうだよ、だからお前をさらったんだよ。あいつらに分から
せるために。何が正義か悪かは関係ない！ どんなにふざけた野郎
でも無罪にすれば勝ち、自分にお金が入るなんて考えているお馬鹿
な弁護士野郎……！！」

明美の右手が隼人の顔を激しく弾いた。浩子のはつと息をのんだ。
さつきまで怯えていた明美は激しい怒りに震え、浩子よりも鋭い視
線を隼人に向けていた。口は何かを言おうと必死に動くが、何も語
れずただ荒い息をつくのみで、そのうち目じりには涙が溢れ出して
きた。

隼人はそんな明美の変化を視界の隅で見っていたが、やがてその場
に力なく座り込んだ。

「俺にももう、未来や権利はないんだ……」

隼人はうわごとのように呟く。その表情は先ほどまでの彼とは全
く反対の悲しみに沈んだ表情だった。

里美が隣に座って隼人を抱き寄せると、浩子たちに目で合図した。
その意味を受け取った浩子は、明美を連れてそっと部屋を出た。

ドアを閉めて数歩歩いたところで、突然明美が浩子に泣きついて
きた。

「先輩……、あたしついカッとなって……」

それが明美の言える精一杯の言葉だった。浩子は彼女が落ち着く
まで側にいた。部屋の中でも似たような事が起きていた。

第十五話 ガラス戸の向こう側

とある住宅の前に神取と角田は立っていた。田原弁護士が今まで関した少年事件の被害者の調査は確実に進んでいた。今まで調査した中で隼人と里美を除くほとんどの被害者とはその日のうちに会え、話は聞いたものの、今回の誘拐事件に関する情報は何も得られなかった。全員の事件当日のアリバイも成立していた。

一課の課長である神取が、こうして現場に立っているのは事件が進展しないことへのあせりからではない、この日とこの家の住人に特別な思い入れがあるからである。

住人の名は岡部幸成という。そして今日二月三日は彼の息子夫婦の命日。

彼の息子は三年前三茶デパートで少年に刺され、その生涯を閉じた。妻は同じ日、車にはねられ即死した。

三年前、通夜の席で彼が見た岡部夫婦と孫の政也は無念の表情と涙を押し殺し、毅然と弔問客の応対にあたっていた。

「このたびは……」

と挨拶する神取に対し、

「これは刑事さん、捜査の最中にこのようなところまで来ていただくとは……。息子夫婦も喜んでいると思います」

と丁寧に頭を下げた。

神取としては捜査の一環として通夜に出席しただけに、この対応には少し戸惑った。

「さんざん苦労させられましたが、いい息子と娘でした」

そう言う幸成の目じりにうっすらと光るものがあった。それは彼が唯一見せた涙であった。

この事件の捜査にこの夫婦の悲劇が上がって以来、彼は妙な胸騒

ぎがしていた。「岡部夫婦がこの事件に関与しているのではないか？」自分の感を信じる彼としては思いたくも無かったであろう。しかし思った以上は自分の目でそれを確かめたい、その思いが彼をここまで運ばせたのである。

(もし、感が外れていたら線香を二本上げさせてもらおう)

祈りつつインターホンを押す神取。応答は無い。

「岡部さん」

続けてインターホンを押す。そして叫ぶ。

「岡部さん、いませんか」

「課長！」

角田が止めに入った。

「どうしたのですか、課長？ たまたま全員が外出しているなんてよくあることではありませんか」

「そうだったな……」

我ながら刑事らしくないことをした。と神取は反省した。

「寝ているのかもしれない、庭に廻ってみる」

池の鯉が元気に泳いでいる。庭にはほこり一つなく、毎日手入れがされているようであった。

やはりたまたま出かけているだけなのだ、と安堵した神取だったが……。

「岡部さん……」

庭に面した廊下に、息子夫婦の遺影と、家族がまだ幸せだった頃の旅行写真が、飾られていたのである。写真の前には線香と花束。明らかにここに来る人に見てもらおう事を意識している。

「課長、この家の留守をまかされたというお隣の奥さんです……？」
神取を呼んだ角田も、この異様な光景に驚いたようだ。

その婦人の話によると、岡部一家が家を出たのは一月二十三日の明け方だった。

「ここ二ヶ月海外へ旅行する事になったので鯉や庭の手入れをお願いしますが、とおっしゃったのです。岡部さんとは長いお付き合いで私もいろいろお世話になっていましたから喜んでお引き受けさせていただきますました」

彼女の岡部一家への好意は本物のようだ。彼女の表情や話すしぐさから、家族へのそれがにじみ出ている。おそらく彼女も近所の人から好かれていたのだろう。角田は頭の片隅でそう思った。

別の片隅に一つの疑問が浮かんだ。

「しかし、今日は息子夫婦の命日ですね。その日に家を開けるのはともかく海外へ行くのでしょうか」

「息子さんはアメリカにたくさんお友達がいまして。その人たちと一緒に過ごすのだ、と……」

とその婦人は遺影を見つめ。

「日本では法事が出来ない代わりに、毎日あの写真をあそこに飾って線香や花束も絶えず上げてくれておっしゃっていました。その代金まで頂いたのですが、とんでもありません。後でお返ししようと思っています」

婦人はそう言うと、遺影のまえに立って、服の汚れもいとわず膝をつき、手を合わせた。

「本当に息子さん思いの方でしたよ。坊ちゃんも素直で……。幸せに暮らしていたのですよ、三年前までは……」

婦人の声が震える。

「事件があつた後、近所の皆さんで、何かできる事は無いか、と聞いたのですが、かえって皆さんにご迷惑をかけました。と頭を下げ……。あの人が何も謝ることではないのに……」

泣き崩れる婦人を角田が支えた。よろよろ歩きながら婦人は角田と共に自宅へと戻った。

「岡部さん、やはりあなたは……」

言葉が続かない。神取は彼と写真を隔てるガラス戸に手を触れた。このガラスの向こうには写真だけではない何かがある。岡部一家の

幸福・悲劇・無念、様々な思いが向こう側にあるだろう、彼はそれを感じたかった。

しかし捜査令状が無い神取はその向こう側へ行く事が出来ない、いやあつても行くべきではない、行っても彼らの思いは実感できないのだ。と彼は思った。

今はただこうするしかない、と彼は先ほどの夫人と同じく膝をつき、手を合わせた。

感傷に浸っているのは僅かな時間だった。ふと視線を感じた神取は玄関へと目をやった。庭を覗き込もうとしている少年と目が合った。

「おい、何をしている」

婦人を送った角田が少年の後ろから声をかける。少年は彼を押しつけ走り出した。

「待て!!」

元サッカー部で関東地区大会でも上位だった角田のスピードになう者はいない、間もなく少年は神取の前に突き出された。

「なぜこの家を覗いていたんだ？そしてなぜ逃げた。」

「許してください、僕はただ……謝りたかっただけなんです。」

「誰に謝るといふんだ」

角田が抑えている彼の右腕を締め上げる。

「痛いっ！岡部さんにですよ……」

「角田、彼を車に乗せる。話がしたい」

「車に？ 僕を警察に連れて行くというのですか？ 僕はもう悪い事をしてません！！本当です！僕を放して下さい。許してください！！」

少年は心から神取に訴えた。その姿に彼のある予感が確信に変わった。

「安心してくれ、別に逮捕しようとかいうわけではない、ただ話が聞きたいだけだ」

車に乗せるのは彼に対する配慮であった。少年は神取を信じ車の後部座席に乗り込む。神取のみがそれに続き扉は閉まった。

第十六話 科学の実験

「君の名前を聞いてもいいかな」

まだ暖房の効き目が残っている車内で神取は少年に尋ねた。

「さえき ようへい佐伯洋平です」

少年は少し間を置いて答えた。眼鏡の奥の瞳が少し落ち着かない。

「岡部さんに何を謝りたいんだい？」

「……」

佐伯少年の顔が曇った。右足をカタカタと揺らし、目はじっとその動きを追っている。神取はその様子をじっと見つめていた。

車外では寝不足気味の角田が大きなあくびをしている。通りすがりの女子生徒にその大きな口を笑われると慌てて口を押さえた。近くの小学校から子供たちの叫び声と笛の音が聞こえる。

「サッカーかあ……」

角田は車に寄りかかった。久しぶりに周りの音を聞いたと思った。車内の二人にも小学生の声は聞こえていた。ふと神取は近頃娘と会話していかない事を思い出した。たまに帰宅できても彼女の寝顔しか見る事ができない。

（事件が解決したら二日くらい休みをもらって遊園地にでも連れて行くかな）

もともと中学生の娘が父親と一緒に歩く事を受け入れるかどうかだ。

佐伯少年の脚の動きがいつの間にか止まっていた。視線が声のするところを追っている。彼にもこの声に何か感じるものを持ったようだ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴ると小学生の声は収まり、周囲はまた静かな住宅街へと戻った。佐伯少年がやっと口を開いた。

「僕は三年前にこの家に住んでいた警備員さんを殺したのです。刑

事さんも知っているでしょ、三茶デパートの殺人事件、あの犯人は僕です」

「……」

「僕の得意な教科は化学です。特にいろいろな物質や元素が好きです。刑事さんも昔習ったでしょう。電気分解とか、いろいろな物質が融合して一つの物質になったり、逆に一つの物質から様々な物質に分解されたり……」

「中学生の教科書じゃ物足りなかったので図書館やインターネットでいろいろ調べたのです。僕には友達がいまませんでしたから、調べる時間はいっぱいあった。そしてこの世の中にはまだ発見されていない物質や現象がいっぱいあるということに気がついたのです」

化学の話をする佐伯少年の顔は活き活きとしていた。三年前神取は佐伯少年が犯した事件の捜査に当たっていたが外回りばかりをしていたため、最後まで彼に会うことは出来なかった。少年担当だった刑事に聞いたところでは、彼は険しい顔で「僕の実験の邪魔をしたからだ」と呟くだけだったと聞いている。

「刑事さんも他の皆さんもあれは爆弾だと思っっているようですが、あれは実験装置なんです。水素と塩化マグネシウムを急激に暖める装置。自分でつくったんですよ」

佐伯少年が実験装置に火をつけようとしたところ、たまたま岡部警備員がトイレに入ってきた。佐伯少年は実験を始めるための障害になると思い、実験装置製作のために買ったナイフで彼の腹部を刺した。

「僕は自分の実験の邪魔をされたくなかっただけなのです。実験場所をデパートに選んだのは実験の成功を少しでも多くの人にすぐに伝える事が出来ると思ったからです」

神取にとって全てが初耳であった。彼の家族や知り合いに話を聞いたところ皆彼に無関心で何も得るところが無かった。そうこうしている間に人権団体や弁護士団体、一部マスコミからの圧力に嫌気がさした上司がまるで佐伯少年を放り込むかのように検察へ送って

しまったのだ。

「しかし僕はとんでもない事をしてしまったと気が付いたのは事件から一年ぐらい経った後でしょうが、弁護士の方原さんという話をしているうちに気づかされたのです」

少年の顔が再び曇り、黙り込んだ。神取はただじつと見守るだけだった。

車外の角田は体を温めるために缶コーヒーを飲んでいて。彼の目の前を薄い袈裟衣一枚を身にまとった二人の僧侶が通過した。この近くにお寺があるらしい。薄い袈裟衣は何かの修行なのだろうか。角田はそれを見て再び寒気を覚え、慌ててコーヒーを飲み干した。

「僕は実験の邪魔をされなくなかったからあの警備員さんを殺してしまった。しかし、それは同時にあの警備員さんやその家族の幸せの邪魔をしてしまったのだと気づいたのです」

「その後当時の新聞を見て自分が刺した人が誰であったか知りませんでした。その人の奥さんのことも……。僕は自分の都合のために岡部さんにひどいことをしてしまったのです」

佐伯少年が激しく窓を何度も叩いた。その後精神病院での話や、退院後の話などを語った。

「岡部さんに謝ろうと思ったのはなぜかね？」

「殴られたかったからです」

「？」

「僕がどれだけひどいことしたか、僕が誰を刺したか、僕には分かりません。しかし岡部さんには誰が息子さんを刺したかは分からない。退院後家のテレビで多くの少年犯罪を見ました。多くの家族が『犯人に会って首を絞めてやりたい』とか、『犯人になぜ自分の家族を殺したのか聞きたい』と言っていました。だから僕はそれを伝えたいのです。断られるかもしれないし、殴られるかもしれない。でも、そうしなければ気がすまないのです。犯人の名前が被害者に公表されないのなら、自分から名乗りに行こうと」

「岡部さんの住所は自分で調べたのかい？」

「はい、分かるまでに半年かかりました。そして田原さんに謝りに行くことの了承を得ました。田原さんは私を信じて私を一人で向かわせたのです」

あの時、少年の取調べに当たった刑事が見たら彼の様子を見たら驚くだろう、と思った。同時に彼をここまで変えたであろう田原弁護士に感心した。

「刑事さんは岡部さんの家を調べていたんでしょう、岡部さんに何かあつたんですか？」

自分の話を終え、一息ついた佐伯少年が神取に尋ねた。

「なに、近くでちょっとした変質者が出たんだ。そこで住民に注意を呼びかけていたのだよ。でも岡部さんは留守でしばらく海外旅行に出かけているそうだ」

顔色一つ変えることなく彼は答えた。

「そうだったんですか……」

佐伯少年は落胆した。せっかく決意してここまで来たのに相手が不在なのだ。その落ち込む彼に神取は声をかけた。

「しかし君は会えなくても岡部さんの家の前まで来たんだよ。自分の行いを冷静に見つめ、反省できたからここまで来たんだ。三年前とは違う君がいる、変わった君がいる。その自分を信じなさい。自分が変われるきっかけ、自分を信じるきっかけになつたと思えばこれも無駄ではない」

「でも、僕は、僕は……」

佐伯少年が眼鏡を取り、泣き崩れた。神取は彼の気が済むまで思いつきり泣かせようと思った。

小学校からお昼の校内放送が流れている。角田の右手には三人分の昼食が入ったコンビニのビニール袋が握られていた。

「君はこれからどうするのだね？」

佐伯少年がやっと落ち着いたので、神取は彼に尋ねた。彼は素直に答えた。もう視線がさまよう事は無かった。

「分かりませんが、化学の本はこれからも読もうと思います。でも化学者になる事はないと思います。僕は僕の化学のために岡部さんの幸せの邪魔をしてしまった。だから僕も化学者としての幸せを封印するのです。それが岡部さんに対するせめてもの償いです。将来のことは化学の本を読むついでに他の分野の本を読んで決めようと思います」

「お昼までごちそうして頂いてありがとうございます」
車外に出た佐伯少年が二人に頭を下げた。

「コンビニの弁当でよかつたらいつでもおこりますよ」

「いつでも経費で落とせんがな」

調子に乗っていた角田に神取が小声で水を差した。

「本当に神取さん、ありがとうございます。これからは少しずつ自分を信じて生きていこうと思います」

佐伯少年はそう言うと、走り去った。途中で老人にぶつかりそうになりぺこぺここと頭を下げた。

神取は彼が角を曲がって見えなくなった後も、彼が去った道を見つめていた。小学校からチャイムが流れ、子供たちの元気な声が再び聞こえた。

「課長、そろそろ戻りましょう」

角田に促され、神取は車に乗った。

「署に戻ったら今までの捜査の状況を全員で確認しよう」

二人の耳は再び、周囲の音を通り抜けるだけのものとなった。

第十七話 次を狙う者

「三人ともせめて今日ぐらいは休んでくださいよ」

調理室に里美の声が響く。岡部一家は息子夫婦の命日にも関わらず、山荘にいる全員の食事を作るうとしていたのだ。

「いいんだよ里美さん、いつも通りで。息子夫婦には今年の法事は無理だ、とちゃんと謝っておいたから」

「しかし、だからと言って……」

「こんな私たちの料理でも『おいしい』って言ってくれる子供たちがいるんだ。それに応えてあげなければならぬ」

「でも……」

「ありがとう、里美さん。しかし私たちは人質の子供たちに余計な心配をかけさせたくないので。ただでさえ自分は監禁されている、いつ危害が加わるかわからないという恐れがあるのに……。他人の死の話など聞いたらどうでしょうか？ 息子夫婦もそれは望まないはずですよ」

そこまで言われて、里美は何も言えなくなった。そして先ほど浩子や明美に事件の動機を話した事を後悔した。後で様子を窺ったが、二人とも気丈でいたのがせめてもの救いだった。

その日の夕食もいつもと変わらずに終わった。浩子は岡部一家がいつもよりも元気がないと思ったが、特に詮索はしなかった。当然、一家にとって今日がどんな日であるか最後まで気づかなかった。

この夜、岡部一家はいつもと同じ時間に同じように就寝した。

その頃東京のテレビ局では一人の男が気焰をはいていた。前の総理大臣、畠山義輝。上杉総理の抵抗勢力の代表として、そして民自党内の少年法改正反対派の首領として出演を依頼されたのだ。

「すると畠山前総理は犯人に断固たる態度をとれと総理に求めるのですね」

「その通りです。政府は犯罪者の要求に屈してはいけません。それなのに孫を誘拐されたからとおろおろしていて、情けない。しかも事件の対応をですよ、我々総理を選んだ民自党議員に相談をせずに、側近や公民党の党首に相談する。こんな馬鹿げた話は無い！」

ニユースキヤスターの質問に左手を激しく動かしながら答える畠山。それを隣で見つめる解説者の目には何か冷ややかなものがあった。

「ここでその他の各政党の動きを伝えてもらいましょう」

各党本部へと中継がつながり、カメラが自分はずしたと思うと、畠山はかすかに笑った。

（これで上杉の次は私がしっかり実権を握れるだろう）

しかし畠山は知らない。画面の片隅で自分の姿が小さいながらも写っていることを、隣で解説者が彼を冷ややかに見つめている事も

（この男は相変わらず自分の権力のことしか考えていないのか、五年前はこの国のことを考えた少しマシな男だったのだが……）

政治を二十年取材し続けたこの解説者の心のうちなど当然知る由も無い。

どの党も党の意見としては改正の有無をはっきりと表明できないようであるが、内部では賛成派と反対派が激しく対立しているという事が伝えられた。

「いや、どの党もゴタゴタしていますねー」

「それはそうでしょう。この国の議会政治が始まって以来の大事件ですよ。すんなり意見がまとまってしまっほうがおかしいんです。

どの党も反対派には頑張ってもらいたいですし、次の時代はこの人たちが政治を担ってもらいたいですね」

当然この人たちの中に畠山は自分も入れている。

「畠山さん、民自党内では上杉総理に対する責任論は出ているのでしょうか」

解説者が畠山に問いかける。大きな事件が起きれば必ず起こる話である。

「今は事件をどのように解決するか、少年法問題をどのように解決するか、それだけです。責任論はその後、最も進退は総理自身自らがご判断される事でしょう」

「次の総理は誰がなるべきだと思いますか」

ニユースキヤスターが続けて尋ねる。畠山は意地悪な質問をするな、と苦笑しながら。

「それは党内で決める事です。私一人が勝手に決めるものではない」と答えをはぐらかした。

「……畠山さんが総理大臣ならどのような対応をするか、見てみたいものです。畠山前総理、ありがとうございました」

期待していた答えを得られなかったのか、最後にキヤスターは皮肉を入れた。畠山の表情は何も変わらない。画面がコマーシャルに切り替わる直前、解説者の苦笑いがテレビに映った。

畠山の車が民自党本部に戻ったのは日付が変わった直後だった。車を降りるなり彼は同乗していた側近に尋ねた。

「野上君、法務委員会の出席議員の中で改正に反対するものは何人いると思う」

「我が党の委員十三人のうち、うちの派閥からは三人、山上派からは二人、張内派から一人、これが有力な反対派ですね」

衆議院法務委員会は全部で三十人。公民党の四人を合わせて十六人と与党は何か過半数を超えている。普通の法律の作成・改正・廃案の審議なら畠山にとっては喜ばしい状況なのだが、今回は違う。畠山としては上杉総理にダメージを与えるためにはなんとしても改正案を廃案にしなければならぬ。そのためには自ら反対派を集めるしかない。

「六人が……他の党の反対派を加えても少し心もとないな……」

「しかし、あとの四人は上杉派です。最後に残る三人は……」

「あの男か」

畠山は恨めしそうに党本部の一室を睨んだ。幹事長室はまだ明か

りがついている。安田誠も多数派工作を行っているのだろうか。

「安田を説得してみるか」

「分かりました畠山先生、安田のような若造などは私におまかせ下さい」

「いや君に頼んでいるわけではない」

冷やかに畠山は野上に告げた。

「私が自ら話す」

「畠山先生……。こんな時間にどうしたのですか」

幹事長室に畠山が来たのは始めてであるが、安田の表情に動揺が見られない。

「君とこの国の将来について話がしたい」

畠山がそう言って座った席はなんと幹事長席。

「私は少年法の改正に賛成しますよ」

安田は動じず、相手の出鼻を挫いた。

「君は本気でそう思っているのかね」

「はい、本気です。それでは畠山先生、あなたは本気で少年法改正を反対しているのですか」

「そりゃそうに決まっていますだろう」

「上杉総理が改正に反対でも？」

「……」

痛いところをつかれて言葉に詰まる畠山。

「あなたはただ上杉総理に代わって政治の実権を握る。反対の理由はそれだけでしょう」

「き、君はそれでは犯人の要求を全て呑もうというのか!!」

この言葉は反対派の十八番である。賛成派はこれを言われると必ずといっていいほど発言がさえなくなるからだ。

「私は犯人の要求以上の厳しい改正案を作ろうと思っています」

「何!？」

「犯人の思い通りの法律を作るなど議会政治にあってはならない事

です。だから私たちは犯人の要求とは全く別のところで別の改正案を作り提出します。」

「き、貴様……！ この事件を利用して自らの意見を押し通そうとするのか……！」

興奮した畠山は席を立ち、安田の襟をつかんだ。

「事件を利用しようとしているのは先生も同じでしょう」

冷静に安田は手を払う。

「……！」

「先生もこの事件を利用して表舞台に返り咲こうとしている。しかし、ただそれだけです。私たちは自分のためだけじゃない、この国を新しい方向に持っていくために利用するのです」

安田は話しながら部屋の中を歩き出した。畠山はおろおろと彼を目で追う。

「畠山先生……。あなたはたくましい人だ」

安田が幹事長席に座った。やっと本来座るべき人が座る形となった。

「なんだって？」

畠山には自分が座る席すら検討がつかず困っている。

「誰もが驚愕したこの事件を自らのプラスに捉えようとしている…

……。あ、適当なところに座ってください」

そう言われて、やっと畠山は視界に入った椅子にどっと腰を下ろした。

「私も同じです。しかし私はこの国のプラスに捉えようとしているのです。先生の自己中心の考えでは所詮レベルが違うのですよ」

もう畠山に最初の勢いは無かった。よろよろと部屋を出ようとする。

「畠山先生、ちょっと」

と安田が机から一本のビデオテープを取り出した。

「畠山先生が今日出演なされたニュースのビデオです。先生の発言に国民がどのような思いを抱いているか、少しはヒントになります

よ

「畠山は素直にテープを受け取る以外なすべが無かった。

廊下をどぼどぼと寂しく歩く畠山の後姿を見つめ、安田はつぶやいた。

「畠山先生……。あなたは良くも悪くもたくましい人です。あなたが五年前のような……。法務大臣就任時のあなたに戻れば……。次の私たちの時代にも生き残れるかもしれません」

安田は勢いよくドアを閉めた。バタンツと力強い音が響く。夜が明けるまで彼の部屋の明かりが消える事は無かった。

第十八話 誠意のいたずら

朝から岡部政也の姿が見えない事に浩子は気が付いた。彼はもともと食事のとき以外、浩子たちの前に姿を現すことはあまり無かった。食事が終わるといつも自室にこもってしまう。たまに外で見るときは見張りをしているときだった。

しかし、食事の時間にもいないのは何かあると思い、浩子は祖父の幸成に聞いてみた。

「風邪をひいちまったんだよ。昨日夜遅くまで雪かきをしていたせいで」

浩子は昨夜彼がスコップを持って外へ出るところを目撃している。「お大事になって伝えてください」

浩子は幸成の言葉を信じ、ロビーへと向かった。昨日とは違い、里美はいつもの寝起きの里美に戻っていた。

「少年法の改正を反対する、全国教師連合が改正反対の署名、約五万人分を持って昨日法務省に提出しました。代表の一人は政府は断固たる姿勢を取れ、と報道陣や街頭を歩く人に訴えました」

「のん気な人だ。この代表は自分の発言に責任を持っているのかな」事件に関連するニュースに突っ込みを入れる隼人。この突っ込みが何を意味するのか、浩子は後で知る事になる。

正午を過ぎた頃、隼人の携帯に電話がかかった。

「おう、政也か。どうだ上手くいったか」

朝、幸成が言ったのは嘘だったのか、偶然ロビーを通りかかった浩子は、そっと隼人の声が聞こえるようにとソファーに隠れた。

「そうか、じゃああともう一つだな。そっちのほうが難しいが、昨日教えたとおりにやれば捕まらずにすむ」

政也との電話を終えてすぐに、隼人は携帯のボタンを押し始めた。「おまえ、今どこにいるんだ？」

後藤という男か、と浩子は思った。

「そうか、高知か。じゃあいつもの通り総理官邸に電話を頼む。あ、あともう一つ頼まれてくれないか」

そう言うとき隼人は口元を押さえ、急に小声になった。浩子には彼が何を命令しているのか分からなかった。

「そう言うことだ」

再び隼人の声が大きくなった。そして、政府と新たな交渉が始まるうとしていた。

「どうもお久しぶりです」

隼人の電話を受け取ったのは神取喜明である。事件発生以来総理官邸では常に犯人からの電話を取れるようにと、二十四時間体制で捜査一課の刑事が電話の側を離れなかった。

「法律案はまだですか」

「それは各党内でまだ審議中です。いずれ分かるでしょうが……。それよりお嬢様は無事なのですか」

総理の秘書としての演技をする神取。

「ああ、そうです。今日はその事でお話があります。我々の要求が通った場合の人質解放の件です」

「……今さら別の要求をしようと言うのですか？」

怒鳴りたいところだが犯人を刺激してはまずいと、神取は声を抑える。

「いえいえ、そうではありません。ただ、各党どれだけの誠意を見せたか、つまりこの改正にどれだけ積極的に動いてくれたかで、解放の有無を決めようかと思っています」

神取をなだめるように話す隼人。

「？」

「この少年法改正に積極的だった党には人質を無事に帰しましょう。消極的だった党には人質の腕を送ろうかと思えます。努力もしない奴に褒美を与えるほどの平等思想を我々は持っていません。従って、どうせ賛成多数で可決するのだから、我が党だけ反対してアピール

しようというおろかな目立ちたがり屋の戦略は通用しません」

「この件はすぐにマスコミに伝えてください。ああ、そう弁護士のお娘さんの件ですが、弁護士団体の動き次第で解放を決めようと思いません。間違っても五万人の署名なんてしないようにと刑事さん。伝えてくださいよ」

自分が刑事だと知っている、逆探知される事も承知で長々と要求する相手に神取はゾツとした。

「連絡はこれで最後と予定しています。どの党も我々の期待に沿えるよう楽しみにしていますよ」

暫く間をおいた後、隼人は再び口を開いた。

「そうだ、大事な事を一つ。我々もどれだけ本気でいるかその誠意を見せてあげましょう。千代田区のどこか一ヶ所にいたずらを仕掛けました。被害が最小限に抑えられよう、頑張ってくださいよ。刑事さん。それと、各党の党首に励ましのメッセージを送りましょう。党内の抵抗勢力を我々は断じて許しません。その償いは党首だけではなく本人にも取ってもらおうと」

電話はそれを最後に途切れた。すぐさま逆探知の作業に入る。場所は高知駅前の公衆電話からとの連絡が入り、県警がすぐに現場へと向かうが、無駄足であるの言うまでも無い。

「千代田区内に何かを仕掛けただと」

官邸内に動揺が走る。

「国会議事堂ですか？」

「そんな馬鹿な、あそこがやられちゃ法律改正どころじゃなくなる」

同様に政府関係の建物の可能性も低いだろう。結局神取ら捜査一課は制限時間内に正解を得る事が出来なかった。十分後警視庁から連絡が入る。

「なに、日比谷公園が……！！」

日比谷公園の大噴水の周りは今日も賑やかだった。楽しそうに遊びまわる子供たち。それを見守る母親、憧れのミュージシャンに――

目会おうと足を急がせる若い男女。その光景をキャンパスに描く画家。

細江理沙ほそえりさも描かれる光景の一員であった。週に数回ここに来ては山の手の奥さん同士のつきあいとが、夫の上司・同僚相手の煩わしい人間関係から解放されるのである。

「ママ、あれなあに」

一人娘の奈々子ななこの指差した先には無人のベンチがあった。その下に箱らしき物体が置かれている。

理沙は辺りを見回したが、どのベンチにもその物体は他に無い。

（気味が悪いわね）

不審に思った彼女はその場を立ち去ろうとしたが、娘の奈々子はその物体に向かって歩き出していた。

「奈々！ そっちへ行ってはいけません」

「大きな箱だよママ」

母親の制止より好奇心が勝ったのか奈々子はその物体に近づく。理沙は捕まえようとするが、公会堂へと歩く男女の一団が彼女の前を横切る。奈々子のその物体の間はあと数メートルしかない。

「奈………！」

ジリリリリリッ！！！！

突然その物体が大きな声を上げた。奈々子はそれに驚き、尻餅をついてその場で泣き出した。

これは奈々子にとって幸いであった。なぜなら声を上げてから数秒後、その物体が大きく火を噴いたのである。

もしあのまま近づいていたら……。やっとのことで娘を抱きしめた理沙は、周囲の逃げ惑う人々にも構わず、ベンチの燃えゆく様を呆然と見つめていた。

画家が水入れの水をかけたが、どうにもならなかった。

第十九話 増殖する恐怖

「時限発火装置が作動!？」

日比谷公園の事件は隼人の発言を含めて、夕方までに全国に広まった。現場が警視庁の前だった事で適切な処置がとることができ、幸いにも被害はベンチ一つの全焼に留まった。

しかし政府や警察の関係者の精神的被害は尋常ではなかった。高知からの電話と東京での事件、犯人グループは全国各地に多数潜伏しているのではないか。という憶測が駆け巡る。

知らせは安田との論争に屈してもかたくなに改正反対派を集めようとする畠山の耳にも入った。

「先生、これはもうただの事件ではなく国家に対するテロ行為なのでは？」

取り巻きが口々に叫び、彼に意見を求める。

「……っ！ テロならばなおさらのこと、改正させるわけにはいかん!！」

そこへ新たなる事件が起きたとの知らせが入る。畠山はそれを聞くと、愕然とし、膝から崩れ落ちた。

「畠山先生!！」

取り巻きの必死の呼びかけも彼の耳には入らない。

「本日午後三時ごろ、埼玉県川越市の路上で、女子校生が何者かに襲われ、服をカッターのようなもので切りつけられるという事件がありました。女子校生の話によると、後ろからいきなり薬品のような物を嗅がせられたということであり、この女子校生が気絶した後服を切りつけられたものと埼玉県警は見ております」

「……その事件に関して、新しい情報が入りました。被害者の女子校生は、畠山義輝前総理の姪にあたるということです。倒れていた彼女の隣には『抵抗勢力は許さず』との声明文が落ちており、犯人は先の誘拐事件を起こした一味の一人であるとして、警視庁が捜査

の指揮を執るといふことです……」

「誰かに目撃されなかったか？」

「ニュース画面を見ながら、隼人は政也に尋ねる。政也は無言で頷いた。

「そうか……。おや、お嬢さん。テレビが見たいならそんなところで見ないで、こっちへ来な」

浩子の存在に気づいた隼人は浩子を手で招いた。浩子はそれにしたがい、彼の隣に座る。入れ替わるようにして政也が自室へと戻った。

「もう一つ、事件の知らせが入るはずだ」

そう言うと、隼人は浩子の顔を見て笑った。

「後藤にお願いした事だよ、小声で話したからお嬢さんには聞こえなかったと思うけど……」

自分が盗み聞きしていた事を隼人は知っていたのである。その事に驚く暇は無く、浩子の視線はテレビに向けられた。

「たった今入ったばかりのニュースです。全国の小・中・高等学校の教師たちで結成されている、全国教師連合の香川県支部が置かれているビルが、先ほど何者かに放火されるという事件がありました。火元は、支部が置かれているビルのごみ置き場で、事件当時、ビルには誰もいなかった事と、近隣の住民の協力ですぐに火は消し止められたため、死者・負傷者ともにありませんでした」

「この全国教師連合は、今日の朝『少年法改正案反対署名』を提出しており、それに対する犯人グループの報復と見ております」

隼人の朝の発言が浩子の脳裏に蘇る。

「ごみ置き場はよい選択だな。怪我人も死人も出しにくい」

「……！？」

浩子が顔に浮かべた疑問に、隼人は即答した。

「死人を出さないように手を抜いておくからこそ、本気を出した俺たちを政府は恐れる。ますます少年法を改正せざるを得ないわけだ」

「犯人グループは全部で何人いるの？　あなたたちだけじゃないの？」

隼人は自ら指を折って数えていく。しかし二十を越えたあたりで「面倒だ、教えてあげない」

と意地悪そうに浩子に言った。

各テレビ局はその夜、当初の予定を全て取りやめ、今日起きた三つの事件と、次に起こりうる事件の可能性についての話題を流し続けた。事件のショックは大きく、彼らは新たな恐怖を自分で作り上げ、全国に広める。

「テロリストは日本国内の少年法改正反対の議員や、識者の個人データを全て持っているそうだ」

「いや、国内だけじゃない。今月十六日に訪日するイギリスのベーター首相にも何か要求を突きつけているらしいぞ」

次々と作られる新たな情報、それが流れるたびに隼人の表情は明るくなるものとなっていく。対照的に里美はそんな隼人を見て表情を暗くしていった。その両者の隣でニュースを見ている浩子は二人の変化の違いに気が付いた。彼女はすぐにロビーを去った。また表情に出すと隼人に悟られかねない。

午後八時、総理官邸の新たな動きが直江官房長官を経て各マスコミに伝えられた。

「与野党を問わず、各党の幹部・法務委員は官邸に集結するようになると呼びかけました。また、東京在住の法律関係者数人にも、官邸に来るようにとの電話を入れました」

会見場に集まった記者たちにどよめきがはしった。

「一体官邸で何をするのですか？」

「少年法改正案の作成ですか？」

「犯人たちの要求に従うというのですか？」

次々と浴びせられる質問を直江は全て黙殺した。会見場を去る直江の背中に激しい質問と罵声の声浴びせられた。

直江から満足な回答を得られなかった記者たちは、続いて直江の上司である総理大臣・上杉景正を発見すると同様の質問を浴びせた。「総理、少年法は改正するのですか!？」

「犯人の要求に従うというのは、国として恥ではないのですか?」
「……」

景正は何も答えず、一人執務室へと向かう。彼は事件が起こる以前は記者の質問には明るく答える男だった。しかし、事件以後はいつもこの調子である。今日になり、その表情はかなりの疲労感と焦燥感であふれていた。

(ここまでこの人が追い込まれるとは……)

長年景正の顔を見てきたこの初老の記者は、今の彼の姿から今までに無い苦悩と悲痛な思いを感じずにはいられなかった。

警備員が押しかけ、景正を追う記者たちを阻む。両者の距離はゆつくりと広がっていった。

「総理ー!」

初老の記者は思わず大声で叫んだ。自分でもなぜだか分からない。ただ、叫ばずにはいられなかった。景正はその声を聞くと、ゆらりと力なく振り向き、彼に近づいた。

「君は……よく見る顔だが、ここの記者を何年やっておる」

「はい、官邸付きは三十年です」

「そうか……、佐藤先生のと時からか……」

佐藤先生とは総理を八年間務め、この国の経済の発展と、外交面においてこの国の立場向上に大きく貢献し、「七十年代の名宰相」と呼ばれた佐藤瑛作さとうえいさく元総理のことである。

「君は今までいろんな総理を見てきただろう……。たぶん……私は最低の総理になるかな……」

そう自嘲の笑みを浮かべると、また景正はゆらゆらと歩き始めた。記者は今度は何も言わずに見送った。記者たちと景正の距離が再びゆつくりとしかし確実に広がっていった。

第二十話 日記

三時間後。景正は同じ廊下を歩いてきた。どこともなく中空を見つめ、上からひもで吊るされているかのようにふわりふわりと横から何かの力を加えれば、あっさりと倒れてしまつたろう。

「『私は最低の総理』か……」

自分を笑えば少しは楽になれるのかもしれない。彼は心の中でとことん自分を笑い飛ばすことにした。

（皆は私のことを無能者とか臆病者よ、と非難するだろう。ああ、そうさ私は臆病者さ。私はこういう人間だったのさ。この私が総理になつた事を不運に思うがいい）

しかし、その結果から得たものは空しさだけであつた。景正の体がさらに軽くなり、やがてその姿は執務室へと消えた。

この直後、官邸では各党の幹部や法律の専門家が集まり、直江信太郎を主導として、少年法改正案の作成が夜を通して行われた。政府は犯人の要求を全面的に受け入れる事にしたのだ。

「みなさん、どうもお疲れ様です。この法案は夕方の法務委員会に提出します。各党で法案の内容の是非をよく検討してください」

午前六時、直江の言葉と共に一同は散会した。少年法改正案の完成。直江はその足で会見場に向かった。朝のニュースはこの出来事にほとんど費やされる事になる。

一方、警視庁捜査一課では神取が頭を抱えていた。事件発生以来一度も家には帰っておらず疲労もピークに達している。

「岡部さん……」

一昨日の岡部邸での出来事で、一家の事件への関与を確信していったはずの彼は、それに疑念を持ち始めていた。あの一家が昨日の事件を本当に起こすのだろうか？ そんな彼の頭に新しい予感が浮かぶ。

(彼らは何らかの形で犯人に利用されているのでは?)

そう思うと彼はますます頭を抱えてしまう。そんなとき、杉並署から一人の刑事が訪れた。

「どうも突然、すいません」

久保田という刑事は、大変恐縮そうにペコペコと頭を下げた。そしてソファに腰掛け、お茶を一気に飲み干すと、今朝起きた出来事について語り始めた。

午前六時三十分、杉並署にあるアパートの大家から電話が入った。「二〇六号室の男性が家賃を滞納している。何度も連絡を取ろうとしたが取れない。夜逃げかもしれないので部屋を搜索してほしい」普通なら刑事がわざわざ出向くことではないのだが、今回の誘拐事件に関連して失踪者が出ている(隼人や岡部一家のことである)ことから、何か関連があるのでは、と久保田刑事が駆けつけ中へと入った。

部屋の主の名は「高杉一郎」という。

「男の中にはいませんでした」

久保田刑事はそこまで言うと、またお茶を一気に飲み干した。よほどお茶が好きなのだろう。聞き役の神取は彼の動きにあわせて顔を動かした。再び彼は語り始めた。

最初は夜逃げかと思った久保田刑事であったが、衣服や荷物を持ち出した形跡が無かった。彼の実家の電話番号を調べてかけてみても彼は不在であった。それどころか今年に入ってから連絡すらないという。

大家に聞いたところ彼はあまり人と接する事はなく、訪れる人もいない。友人と旅行という可能性も無い。もっとも友人がいるならば十日もしないで搜索の電話がありそうなものだ。

「その男の部屋にはこれが……」

久保田刑事がカバンから出したものに一課は騒然とした。里美の写真を集めたアルバムだった。本人に気づかれぬように隠し撮りされたものだろう。里美以外の人物も写っている写真もあるが、他

人は全て、黒マジックで塗りつぶされていた。

さらにもう一つ、彼の日記帳。里美に対する愛情と憎悪の念が狂気と共に入り混じっており、それが毎日このノートにぶつけられていた。

日記の最後の日はこう書かれている。

一月二十六日

今日はなぜだろう。あの人に会えなかった。

いつも彼女がいるところを探し続けたというのに。このところ彼女が一人であるときが少ない。男がいつも側にいる。いつものあの男だ。

あの男は彼女の笑顔をいつでも見られるのだろう。僕はこんなに苦労しているというのに。いつか彼女はあの男のせいで僕の事などを忘れてしまうのだろうか。寂しいよ……。

こんなに愛しているのにどうしてあの男と一緒になのだろうか。

こんなに愛しているのにどうして僕とお話してくれないのだろうか。

そうだ、迎えに行こう。あの人を。僕たちだけの世界へ。あの人の顔は恐怖と血で汚れるだろう。しかしそれは一瞬の事だ。あの人とお話したという記憶は永遠に残る。そこに彼女の髪の毛一本さえあれば、僕は永遠に行き続けられる。そうだ、きっとそうだ。

では行つてきます。

「完全に頭がおかしいですね」

横で見ていた角田刑事は半ば呆れ顔で他の日のページのペラペラとめくる。

「目黒署の高橋刑事に連絡してここに来たわけですが……。その男の血液型とここに書かれている里美さんの血液型とは同じようですね」

神取の目が鋭く光り、角田の手が止まった。あの家の血痕が高杉のものだとしたら里美は。

久保田刑事は二人に構わずお茶を飲むと

「すでにDNA検査は始まっているようです」

二人はその言葉を最後まで聞かずに部屋を飛び出した。

第二十一話 景正倒れる

衆議院法務委員会はその日のうちに少年法改正案を全会一致で可決した。これにより法案は明日衆議院本会議に提出される。すでに政府の方針により本会議もその日のうちに採決する事が決まっている。二院制をとっているこの国だが、衆議院優位の現状では明日少年法改正がほぼ実現する事になる。

「畠山先生、よく来てくださいました。このたびは姪御さんにとんだ災難が……」

委員会通過の知らせを受けた畠山は单身安田の部屋を訪ねた。

「ありがとう。幸い無傷ですんだようだ。それより……」

昨日のショックを引きずっているのか、従来 of 傲慢さが彼にはない。

「犯人の昨日の要求を聞いているだろう。我が派も……、従う事にした。」

安田は窓の外を見ながら畠山の話聞いている。

「委員会では先生の派閥の委員も賛成していました……。やはり少年法の改正に賛成するのですね」

「犯人の要求に屈するなど国会議員として屈辱であるが……。いたし方あるまい」

申し訳なさそうに頭を下げる畠山。

「そこで君の考えを聞きたいと思った」

安田は驚かずに畠山のほうを振り向く。

「君らは犯人グループとは別の少年法改正案を作っている。明日は一体どうするのだ。犯人の法案が可決されれば君たちの思い通りの法案は作れまい」

なんだ、やはりそんなことか。と安田は冷静に答える。

「犯人の要求に従って法律を改正するなど議会政治にあってはならない事です」

これは意外なことを言う、という顔を、畠山は意外にもしない。「しかし今回は人質の命、いや、日本国民全員が危機にさらされている……。人道的立場からいって賛成せざるを得ないでしょう。そうすれば人質は解放され、犯人の脅しも無くなります」

安田が畠山の向かいの椅子に座った。

「そこで私たちが作った新たな少年法改正法案を提出します。犯人に脅されて作った法律などこの世に存在してはならない、……。しかし私たちの法案は彼らの要求を取り入れかつ、もっと厳しい……。たとえば人質解放後、犯人が上手く逃げたとしても犯人たちはこの法案に不満を持つ事はない、逆に称える事でしょう」

「悪く言えば、今回の改正案を形式的に廃案にすることで、法案改正の手柄を君たちが取るうというわけだ」

畠山が意地悪そうに笑う。木枯らしが激しく吹き始め、窓を叩く。「そうです……。しかし畠山先生、これは五年前のあなたが望んでいた事ではないですか」

「ふふふつ……。ずいぶん昔の話をしてくれるねえ」

「あなたが法務大臣のときに少年法改正を自身の公約にしていた。しかし党内の抵抗勢力によってその夢は絶たれてしまう……。あなたはその時以来自身の栄達のみを考えるようになってしまった……。もう一度取り戻そうではありませんか。あなただけじゃない、今まで何人もの議員がこの改正を実現しようとしたが果たせなかった。今こそ実現のときです。畠山先生、力を貸してはくれませんか。私たち維新会が行う少年法の改正に」

安田の言葉の強まりと共に風は激しく窓を叩く。その言葉に畠山は冷静に返した。

「……君たちの改正案の骨子を出来た範囲でいいから見せてほしい。内容も知らないで協力かどうかは言えんからな」

「それなら用意してあります。まだほんの僅かですが……」

安田は机からノートパソコンを取り出して電源をつけた。改正案のデータが現れるまでのしばらくの間部屋の内外は落ち着きを取り

戻した。

「こ、これは……。安田君、これは反発が激しくなるぞ」

口では言っているが畠山は驚かない。

「畠山先生……。悪いのは犯罪者の少年だけなのでしょうか。」

「……。大体少年が罪を犯すのは家庭環境などが影響しているようだな」

良くぞ言った、と安田は少し高揚している。風が再び窓を叩く。

「そうです、責任は家庭……。その子供を育てた親にもある……。

私は少年犯罪に限り、連座制れんざせいを復活させようと思っています。子供が犯した罪を親も償うのです」

連座制とは犯罪者に近い親族（多くは両親祖父母、子・孫）がともに犯罪者と同様の刑、もしくは軽い刑を受ける事である。

「刑の適用も厳しいな。成年犯罪でも死刑制度反対の声があるというのに……」

「再犯を防ぐ一番の方法は犯罪者をこの世から消す事です。大昔のハムラビ法典までとは行きませんが……。平和な世の中を築くためには罪を犯したものは厳しく罰するべきです」

安田が激しい口調にはためらいなど微塵も無かった。

「それでは畠山先生、よろしく願いますよ」

「うむ……。派閥内でよい方向に進めるよう議論しておこう」

そう言うと、畠山は部屋を出た。安田は頭を下げ、彼を見送りながら聞こえないように呟く。

「傲慢な鼻を折られた人間は扱いやすいモノですね……。畠山先生。

しかし安田は大きな誤解をしていた。畠山は五年前の自分を取り戻していたのだ。

（人間は落ちると変わるものだ。あのときは人を上手く支配せねば物事は成し遂げられぬと思っていたが……。もう一度とことん落ちた事に気が付くと、そんなことなどどうでもよくなったわい。安田や犯人どもに感謝せねばな。わしはもう取り戻しているのだよ）

「畠山前総理、一体どちらへ向かうのですか」

「官邸に行つて総理と話をしてしようと思ひます」

民自党本部から出た畠山を記者が取り囲む。いつもは無言だった畠山だが、質問に答えると、車に乗り込んだ。ちよつと民放の一局がこの様子を生中継していた。視聴者はいつもと違つ彼に驚いたことである。

官邸に近づくほど木枯らしが激しさを増す。風の音かと思つたがそうではなかつた。政府の対応に激しく反対するデモ隊の叫びだつた。

「テロに屈する総理大臣は即刻辞職せよ！」

「少年の人権を護れ！！」

畠山の車はデモ隊がない裏口から入つた。そして記者の目を上手くごまかし、景正のいる執務室に入る。

「畠山先生……！」

驚く景正の目は激しくくぼみ、顔は血色が無い。

「君の今回の決断、我が派も賛成しよう」

「先生……、では……」

「今日はその話をしに来たわけではない、上杉君。君も分かつているはずだ……。政治というものは僅かでも空白期間はあつてはならないのだよ」

「……、覚悟はできています」

景正は力なく頭を下げた。

「そこでだ、君の後任の総理に誰がなるのがこの国に一番よいか、考えたのだよ。それを伝えに来た」

畠山がその人物の名を口にした。

「……畠山先生！！」

「野上議員、総理と何をお話になるのですか」

「この国の将来のためになる話をしに行くのです。畠山先生とともに

に」
先ほどの畠山の発言をテレビで見た野上は、彼に続けと総理官邸に現れた。畠山の取り巻きのナンバーワンであり、畠山派のなかでは「次の総理候補の一番手」と言われている。
大勢の記者たちを引き連れながら彼は執務室の前に立つ。記者は警備員に引き離される。それを鼻で笑うと、勢いよく彼は扉を開けた。

「畠山先生……！ 本当によいのですか！」

「ああ、彼なら事件の影響もそんなには受けまい。君の理念を立派に引き継いでくれると思うが」

「ありがとうございます。畠山先生」

景正がその弱弱い手を畠山の大きな手に触れようとした瞬間だった。

「上杉総理、この国の将来のための話をしにきましたぞ」

野上が大きな叫び声とともに割って入った。

「畠山先生、先生がわざわざ出向く事ではないのです。我が派は今回の総理の決断に賛成いたします。その代わり、次の総理は我が畠山派に一任していただきたい。この国の将来のためです」

さすがに「私を総理に」と言うほどおろかな男ではない。

景正、畠山二人の口元が激しくゆがむ。

「何が国の将来だ、結局は自分の将来のためのみではないか！」

景正は吐き捨てるように叫び、絶望した。この男はまだそんな事を考えているのか。

「お前こそなんだ！ この国のことなど考えていないじゃないか！
！」

野上が激しく応酬する。

「お前こそ何が人質の命を最優先だ。結局は自分の孫可愛さじゃないか。たかが孫一人のために法律を変えやがって、てめえこそ国のことなど考えてねえ！ この国を変えるなど総理就任時はえらそう

な事を言っていたが、結局は自分のためか!!」

「うぬぬっ!」

景正は野上に今にも襲い掛かろうとした。野上は怯えながら畠山の後ろに隠れた。畠山はいかにも迷惑そうな顔をした。しかし、景正は襲う体制のまま、ばったりと床に倒れてしまった。

畠山の通報によって十分後に救急車が到着し、彼は病院へと運ばれる事となった。

「総理が倒れたぞ」

「容態は命に関わるのか?」

報道陣は慌てながらも救急車に対して道を開けた。しかし、デモ隊の一部は

「総理が倒れたって」

「どうせ仮病さ。上手く逃げようっていうことだろう」

「それっ、仮病の総理を捕まえろ」

彼らは救急車を取り囲み周囲は大混乱となった。

「貴様ら、道を開けんか、無礼であろう」

激しい叫び声、デモ隊がその声の主を振り向くと、畠山であった。

野上は怯えながら彼の後に続く。

「おう、仮病総理に座を追われたおるか者の元総理だ」

「こいつも少年法改正に賛成だったな」

「それっ、おろかな元総理に水をかける」

デモ隊が畠山に攻勢をかけることによって、道は開かれ、景正を乗せた救急車は病院へと到着した。

畠山はデモ隊の水にもひるまず、前に進む。後の野上は彼を傘代わりにしているので服はあまり濡れない。

そのことに腹立たしさを覚えた（もつともそれだけではない。野上は大きな罪を犯している）畠山は野上の服をつかむと自分の前へと引っ張り出した。総理候補ナンバーワンと言われた男の転落の瞬間だったが、本人はまだ気づいていない。ただ滑稽に畠山の名前を呼びながら、水を手で防ぐのに精一杯であった。

第二十二話 採決前夜

血痕は高杉一郎のものと断定された。DNA検査の結果を聞いた神取と角田は日が暮れて間もなく警視庁に戻った。それを待っていたかのように刑事たちが報告をしに神取の机に殺到した。田原弁護士関連の捜査も今日が最後である。相変わらず連絡は取れたが事件とは関係がないという似たような報告が続く。

刑事たちの群れが去った後、最後の一人が机の前に立った。

「何かあったのか？」

「はい、五年前の中学生の変死事件の遺族に会いました」

五年前、埼玉県のとある中学校で後藤という男子生徒が変死体で発見されるといふ事件があった。体のあちこちに切り傷やあざが見られ、この生徒が日頃からいじめにあっているということから警察は彼らをいじめていたグループの三人を任意で事情聴取した。

しかし、そのうち一人の家族がこのことに憤慨し、田原弁護士に相談。彼の調査や訴えによって「彼らのいじめは生徒の変死とは関係が無い」ということで三人の少年は警察から謝罪を受けた。

大人たちは遺族以外みんな知らなかったのだろう、生徒が死んだ直前、彼がそのいじめグループに呼び出され、母親の財布から一万円を抜き取り、家を出た事を。

「埼玉の家を訪ねたのですが、両親はいました。二人ともこの事件のことは知らないと言っています。ただ……」

「ただ？」

「この家には死んだ生徒ともう一人、男の子がいて、名前は後藤隆、年は十八ぐらいでしょうか、この少年は不在でした」

「たまたま留守にしていただけではないのか？」

神取の聞く態度に情性が生じていたようだ。

「それが……、先月の二十日ごろから出かけているというのです。

彼が言うには東京の大学で知り合った先輩たちと日本一週旅行に出

かけるのだ。と言っていました。」

「二十日というと今回の事件が起こる前だな」

神取が襟を正した。嫌な予感がする。その通りとばかりに刑事が二つの写真を見せた。神取があっ、と驚きの声を上げる。

「これが隆君を旅行に誘った大学の先輩です」

写真に写っている先輩とは藤田隼人と加藤里美であった。

改正案の委員会通過の知らせを受けた社労党党首安藤陽子は幹事長室にいた。

「永井先生、このたびの委員会通過に協力していただきありがとうございます
ございます」

法務委員会には社労党は永井の派閥からも一人出していた。この委員が反対したら……。と陽子は気が気でなかったが、この委員は賛成したため全会一致となったのである。これにより彼女は永井が改正に賛成したとおもったのである。

しかし、これは勘違いであった。

「協力？私は何もしていないよ」

「石崎め……、自分と家族可愛さに永井先生を裏切りやがって……」

「次回の選挙は彼の公認は無しにしましょう。」

取り巻きが口々に石崎議員の悪口を言う。

「まあいい、石崎君には石崎君の理由があるのだ。懲罰など子供じみた事はよそうではないか。」

永井がそうなだめると、取り巻きは不承ながらも黙った。その間、陽子の顔はだんだん青ざめていく。

「どうした、陽子君。顔が青いぞ」

「い、いえ……。するとやはり先生は少年法改正に反対なんですね
「その通りだ。我が党は人権を護る党である。その党の幹事長である以上、また政治家、永井秀雄である以上、改正は絶対反対である」
断固たる永井の拒絶に取り巻きが再び勢いを取り戻した。

「貴様、永井先生の信念が変わると思っているのか!？」

「たかが石崎一人の裏切りで先生の考えが変わったなどと勘違いも
いいところだ」

「永井先生……」

陽子は床に思わず付きそうになったが、何とかこらえた。土下座
や情に訴えて説得できる永井ではないことを彼女は知っていた。

「娘は、娘は……」

と呟きながら陽子はよろよろと部屋を後にした。彼女の顔はすで
に青を越えて蒼白となっていた。

「やはり安藤では我が党の理念は貫徹しません」

「先生あつてこそこの社労党です」

前からそうだが、永井はこの取り巻きの言葉をほとんど聞き流し
ている。

民進党では党首大西敦志が各派閥の長に会い、説得を続けていた。
幸いどの派閥も抵抗は少なく、ほとんどの議員から了承を得られた。
しかしほとんどが条件付であった。事件解決後の人事のことである。
(私の後を党首が勤まる人間はここにいいのか……?)

移動中敦志はそのことで頭を悩ませていた。決して自分に自惚れ
ているわけではない。各マスコミのどこもがこの党の問題として党
首候補としての人材の不足を上げている。

(鵜野先生などの党首歴任者ではもうだめだ……、民自党に対して
ジリ貧のイメージが国民やマスコミに付いている……。有力な若手
もいるがまだまだ経験不足だ、到底民自党の層の厚さには適わない
……)

ほぼ全員に改正の賛成を得ている事から敦志にはまだ党の事を考
える余裕があった。賛成した議員の半数の理由が人道的立場の見解
ではなく、恩賞目当てであった事を敦志は嘆いた。

(だから我が党はもう一步のところまで民自党に勝てないのではな
いか? だが……、例えそんな人たちでも娘の恩人となる事は確か
だ……)

そんな人間関係の不思議さを皮肉りながら、敦志は次の派閥へと向かった。多分同じ事を言われる。彼もまた、同じことを言うつもりだ。

景正が官邸で倒れたのと同時刻、公民党の党首室では激しい論戦が行われていた。

「我々はこれ以上民自党の言いなりになってはならない！」

そう叫ぶのは真柄健太議員。ガラス張りのテーブルを今にも割らん勢いで激しく両手で叩いた。

「民自党の言いなりではない、我が党の総意として決めた事だ」

おだやかに朝倉治夫党首がなだめる。

「我が党の総意だと！勝手に三役で決めた事ではないか、同じ人権を護る党の社労党では幹事長が反対の意思を表明している。我が党は勇気をもって党首自ら反対を表明すべきだ」

真柄に続けと彼の仲間たちが口々に叫ぶ。

「社労党は社労党、我が党は我が党の理念と事情がある」

そこへ、秘書の一人が入室し、治夫に耳打ちした。

「諸君、M H Kや民放各局は明日の採決の様子を全国に生中継する事を決定した。おそらく犯人グループの要求によるものだろう」

党内に沈黙と緊張が走る。穏やかに真柄が破った。

「これで、どの党の誰が反対か国民や犯人に一目瞭然となるわけですね」

「その通りだ、真柄君……。我が党としては我が党の人道的見解により、一人の反対者を出すわけにはいかんのだよ」

「しかし、党首！ こういうときこそ断固として立ち向かうが我が公民党ではないですか、あなたはやはり民自党に……！」

そう党首に迫る議員を真柄は制した。

「党首の考えは分かりました。だからと言って我々は納得できません。採決は明日の夕方。それまでにもう一度話し合ひましょう」

真柄は仲間と共に退室した。扉の閉まる音が合図になったのか、

どつと治夫は座っていたソファ―に横たわった。

「……………どうして止めた。真柄」

真柄に止められた議員は出し切れなかった勢いをそのまま彼にぶつけた。

「党首も人の子だ、党の理念を貫く事で孫の命を捨てる事は簡単に行かない。それに……………」

真柄はその議員の顔をしっかりと見据えた。

「私たちは何を言っても反対しようが被害を受ける事は無い。そこが党首との決定的な違いなのだ」

「いや、犯人は反対の議員にも復讐すると言っているぞ」

「本当に復讐するかはまだ分からない。ただ、それに怯えて賛成する議員もいれば、出来るわけが無いと思う議員。また来るならかかって来いと、思う議員もいるだろう……………」

真柄は廊下の向こうの党首室の扉に目をやった。

「我々にはまだ選択肢がある」

MHKの生中継の知らせは帰宅途中の永井にも入った。彼はそれを聞いても表情を変えず、東京のマンションへと戻った。駐車場にて出迎えた秘書が耳打ちすると、初めて彼は驚いた顔を見せ、急いで部屋へと向かった。

「あら、あなた。お帰りなさい」

出迎えたのは妻の華江^{はなえ}だった。すでに夕食が食卓に並べられている。

「来ていたのか……………」

「明日は大切な日なんでしょう、だからスタミナつけてもらおうと思っ

「大分一区選出の永井は、東京で单身マンションを借りて暮らしている。妻は地元で後援者との対応の役割を果たしている。二人が会うのはいつも地元大分で、妻が東京に来る事などめつたに無いのだ。久々に妻の手料理を堪能した彼は、これまた久々に妻と共に寝る

事になった。

「私のことは大丈夫ですよ、あなた」

電気を消して数分後、突然華江が夫に話しかけた。

「私一人くらい自分で守れます。それに後援会のみなさんもいるし……」

「本当にいいのか？」

「私はあなたが永井秀雄だから妻になろうと思ったのですよ。その夫のためなら、どんな苦勞も耐えられます。現に今までそうだったじゃないですか……」

永井は結婚後二度、落選している。一度目は県議会議員からの鞍変えを狙った最初の衆議院選だった。そのときはまだ初めてと諦める事が出来た。しかし、その後二期議員を勤めた後の選挙で彼は落選してしまう。彼の罪ではない、彼が常に「先生」と呼んでいた。議員が汚職で逮捕されたために、有権者にその仲間とみなされたためだ。

衆議院議員としての自身が付き始めた頃だけにこのショックは大きかった。しかし妻はそんな夫を支え、彼女が先頭に立って有権者が抱くイメージの払拭に励んだため、次の選挙では見事返り咲く事が出来た。

「私のことは大丈夫なんですよ……」

自身を持って華江はつぶやいた。それからまたしばらく間が空いて。

「けれど……、安藤さんは本当にお気の毒ですね。私たちは子供が出来なかったおかげでこうしてずっと二人きりでしたが……。やはり母親として娘をどうしても助けたいのでしょうねえ……」

華江の声が涙ぐんでいるのを永井は背中を感じていた。

「私は一度も母親になれなかったから……、安藤さんの辛さは私の思った以上なのでしょうね……」

「……、私はどうすればいい？」

「ごろん、と体の向きを変えて永井は妻に訪ねた。暗さになれたの

か、ぼうつと彼女の顔が見える。

「あなたは『永井秀雄』です。それを貫き続ければいいのですよ」
華江はそれきり、何も言わなくなった。相変わらずはつきりとした答えを出さない。やがて穏やかな寝息が聞こえてきた。その寝息を背中で聞きながら永井は明日の行動を考え続けた。地方議員も含めて四十年、二人はいつもこうして問題を乗り越えてきた。

第二十三話 反乱

景正入院の知らせは翌日の朝のトップニュースとして報じられた。画面には景正本人は映らず、デモ隊に囲まれる救急車や、畠山たちの姿が幾度も繰り返し放映された。

里美は相変わらずの姿勢でそのニュースを見ていたが、いきなり目の前に現れた浩子に頭を押さえつけられてしまう。

「い、痛いっ」

抵抗する里美。それを押さえる浩子の目は怒りに血走っていた。

「おじいちゃんは無事なの？ 助かるの？ もし助からなかったら……。おじいちゃんにもしもの事があつたら私絶対許さないから」
「それはないな」

後ろから声があったので、浩子は怒りの目をその方向に向けた。雪かきから戻った隼人が服についた雪を払い落としている。

「なによ、無いってどうということ？」

「痛いってば！」

浩子は里美の髪を強く引っ張る。

「安心しろ、お嬢さん。さつき官邸に問い合わせてみたが、命に別状は無いという事だ。たぶん過労がたたったんだろうな」

「本当に信じていいのね」

浩子はふつと里美の髪を離れた。

「ああ、もし総理が死んだらお前を解放し、次の総理の家族を誘拐する。それだけの事だ。まあもつともお前が俺たちに復讐をしようというのなら……」

「そうする前に俺か俺の仲間がお前を殺す」

携帯を指差して隼人が微笑む。俺の仲間はどこにでもいるんだぞ。そう言っているようだった。

隼人が部屋へと戻った後、里美が頭を痛そうに押えながら、
「あいつ……。ああは言っているけど、本当に官邸に電話していた

よ。無事を聞いて安心そうな顔していたし、最近なんか様子はおかしいけど、あなたが思っているほど悪人でもないから……。信じて大丈夫よ」

どこか不安を感じながらも隼人のフオローを入れる里美の言葉を浩子は信じてみる事にした。

同時刻、社労党の本部では、永井秀雄の取り巻きたちが彼の招集を受けていた。何事と騒ぐ彼らの前に、いつもより気合いの入った永井が現れた。

「諸君、朝早くから御苦労。私はこのたびの少年法改正法案に反対票を投じる事にした」

一同「おおっ」という歓声が沸き起こる。

「そこで君たちの覚悟を聞きたい。私とともに反対票を入れる者は、これから私とともにある場所へ向かってほしい。賛成票を入れる者はこのまま党本部へと戻るように」

「そんなわけが無いでしょう」

「我々はどこまでも先生について行きます」

取り巻きたちの中で、賛成を主張した二人を除く残った十四名が永井に同意した。彼らは永井という存在無しには自己を主張する事も、自己を守る事も出来ない者ばかりだった。

「本当に私とともに行くのか、本当にその覚悟があるのか!？」

「先生のおっしゃることなら何にでも従います」

永井の強い念押しに対して、彼らは口々にそう答えた。

「後悔はしないのだな。ならば一緒に来い」

最後の永井の言葉の意味など理解もせず、彼らは裏切り者に罵倒を浴びせながら永井に引きずられて行った。

彼らがたどり着いたのはある記者会見場だった。取り巻きたちは一体なぜこの場にいるのか、ここで何をするのか全くわからないまま、永井の指示に従い、与えられた席に座るしか無かった。

そのおろおろした様子は全国に家庭に流されている事も当然知ら

ない。

「これより、日本社会労働党幹事長、永井秀雄の記者会見を行います」

司会のアナウンスにより、やっとこの場を理解できた取り巻きたち、しかし、永井が話す内容は誰も知らない。

「私が日本社会労働党幹事長の永井秀雄であります」

永井の自己紹介と同時にカメラのフラッシュが激しくたかれる。

「私、永井秀雄と私の同士十四名は本日衆議院本会議で開かれる少年法改正案決議に反対票を投じる事を決定しました」

取り巻きたちにもフラッシュがたかれる。彼らは精一杯の虚栄を示した。

「しかし、我が社労党は党首の家族が人質に取られており、党の議員として反対するには人道的見解として真に危険、反している行為であります」

「だが、私永井秀雄とその同士の信念と致しましては今回の法案に賛成する事は許されぬ行為であります」

永井が大きく深呼吸した。カメラのフラッシュはその様子をも映し出そうと必死に光る。それを見ていた取り巻きの中には永井のマネをするものまでいた。

「よって、人質の命の安全と、私たちの信念の両立のために本日この時刻を持って社労党を離党する事を決意致しました」

会見場がざわめく。取り巻きたちの中にはこれの意味するところを知った慌てた者もいるが、まだ誇らしげにしている者もいる。

「犯人たちに告ぐ」

「この瞬間をもって我々十五名は日本社会労働党とは全くの無関係である。よって我々の反対は人質の命に影響されない。犯人よ、この十五名の名前と顔を覚えてほしい。復讐は我ら一人一人が覚悟をもって受ける。我々はそう決意したのである！」

取り巻きたちは辺りを見回した。彼らの席にはしっかりとネームプレートが目立つように置かれており、名前と顔がすぐに一致でき

るようになっていた。

慌てふためく醜態をさらす者もいれば、やせ我慢の姿勢をとる者、テレビの画像は各個人の様々な反応を映し出していた。

その光景は社労党首である陽子の目にも入った。

「永井先生……。ありがとございます」

彼女は何度も画面の永井に手を合わせた。

「永井先生、これはどういうことですか!？」

会見の後、たまりかねたように取り巻きの一人が悲鳴を上げた。

「君たちは私と一緒にいく覚悟があると言ったではないか」

「それはそうですが……」

全員返す言葉も無い。

「嫌だつたらよいのだよ。このまま党本部へ行つて頭を下げて安藤党首とともに賛成票を入れるか、また君が思う党の理念を貫くかどちらかだ。もっとも後者は君たち独自の党の理念があればの話だがね」

今更ながら引き返すわけにもいかず、十四名は泣く泣く永井に従う事となった。

「社労党幹事長、改正反対のため離党！」

公民党本部の真柄健太の部屋にこの一方が届くと在室していた十二名全員が驚きと賞賛の声が上がった。

「そうか、この手があつたか」

「これなら党にも迷惑をかけず、反対を貫ける訳だ」

「我々もすぐに記者会見を開き、離党を表明しよう」

永井の離党と真柄の反応はすぐに党首の治夫の知るところとなる。彼らの好きなようにさせればよい」

治夫はただ一言、そう言うだけだった。その後幹事長に小声で、

「これで党としての倫理的バランスが保たれるというものだ。もはや私の時代ではない、次の公民党は彼らのような者が中心となるべ

きであるうな」

少し寂しげに、治夫は微笑んだ。

永井の会見から一時間後、真柄健太議員ら公民党議員十二名の離党会見が行われた。その直前、真柄は仲間の一人に声をかけた。

「魚住、嫌ならお前は戻っていいんだぞ。お前は最近婚約したばかりだろう」

やっと得た彼の幸せをこの件で危険にさらしてはいけない、真柄はそう思った。

「ありがとう、真柄。しかしそいつは余計な心配だ。彼女は俺のこういうところが好きになつたのだから」

「そうか……、これは野暮だったな。」

そうだ、野暮だぞ。と魚住は真柄の背中を大きく叩いた。それをしっかりと受け止めた真柄、同士十一名は堂々とした会見を行った。

この両党の会見に勢いを得たのか、民自党、民進党、共民党から少数ながらも離党を表明する者が現れた。

こうした各党の反乱を経て、二月六日午後三時二十分、少年法改正案の賛否を決める衆議院本会議がついに開会した。

第二十四話 採決

開会の時刻が迫る。議場へ向かう議員たち。それを追う報道陣、彼らを制止する警備員と議事堂の入り口は息もつけぬほどの混雑ぶりだった。その人の固まりからやっとのことで抜け出した陽子は、一人の男に呼び止められた。

「これは……、熊沢委員長」

日本共産党委員長、熊沢健くまざわ たけるであった。彼もあの入り口から入ってきたのであるが、いつものことながらスーツ、ネクタイ、髪型と乱れが少しも無い。自身の髪の乱れに気づいた陽子は、思わず片手で頭を押さえた。

「このたびの永井幹事長の決断、大変な事でしたな」

「はい……、でもおかげで娘に危害が加わる事はありません」

「そうですか……、私の党も大変でした」

歩きながら、と健はこれまでの党の情勢を話し出した。各議員から彼に対する非難が噴出し、一時は議員全員が反対票を投じることになったという。しかし一昨日の事件以降、反対の声は収まったものの、話題は熊沢委員長の更迭論へと変わった。

「法案賛成の条件として、私は委員長更迭、次期の選挙の不出馬が決まりました」

さらりと自身に降りかかった災難を語った。

「仕方がないです、兄の頼みですから。兄は……私の学生運動の大先輩ですから」

議場への入り口を通過して、そのまま二人は休憩室へと向かう。「七十年代の安保闘争のとき、兄は私にとって憧れの存在でした。大学の卒業証書なんていらぬ、と退学覚悟で警察と戦っていました。履歴書の内容だけを気にしていた私はその言動に惹かれ、やがて兄と同じように学生運動に走りました」

「お兄さんは……、その後どうさなされたのですか？」

あれほど学生運動で活躍した健の兄だが、陽子はその兄に会った事は無い、議員をしているとの話も聞いた事は無い。

「今は運動から離れて焼鳥屋をやっております。父が倒れたもので家業を継いだのです。だから運動は私が引き継ぐ事になりました」
「そうだったのですか……」

その時、健の様子になんらかの乱れが生じたのを陽子は気づいた。「その兄が……、私に泣きながら頼んだのですよ。どうか俺の息子を助けてくれと。お前にとって法案賛成とは死んでも言えぬことだろう。俺もお前と一緒に闘っていたからお前の気持ち痛みほど分かる。しかし頼む、と」

皺の無いスーツから取り出した白いハンカチが、健の顔を拭くごとに皺になり、涙のしみがつく。

「熊沢委員長、開会まであと五分ですよ」

遠くのほうで声が聞こえると、すぐにハンカチをしまった。陽子に顔を向けたときにはいつもの健に戻っていた。

「さあ、行きましょう」

健の変化に対応しきれず、彼への慰めの言葉を考えていた陽子は、彼に促されるままに議場へと向かった。

入院中の景正を除く四百七十九名の衆議院議員全員がそれぞれ着席した。

総理大臣席に座るのは、景正の指名を受けた直江信太郎総理代行である。

彼の頭にはその時の景正の悲痛な叫びがまだ残っていた。

「直江……、私は総理だが一人の人間なのだよ」

直江に今後の対応を頼んだ後、不意に景正がかすれた声で呟いた。「私は一国の総理大臣だ。しかし愛する家族がいる。趣味もある、好きな食べ物も嫌いな食べ物もある。よく見るテレビ番組もある。当たり前だろ？」

「……」

「それを守ろうとしてどこがいけないのかね。私は国民全体のことしか守れないのかね。人間である上杉景正としての大切なものは守れないのかね」

「しかし、総理大臣は公人で……」

「そんな事は分かっている！」

景正の声が荒いものとなった。

「しかし浩子は公人ではないぞ、普通の女子高生だ。その浩子が危険な目に遭っているのを黙って見ていると？ 浩子は公人ではない、私は公人だが、浩子の祖父である。浩子を守る義務があるのではないか？ 総理大臣になる事は浩子の祖父である事を放棄する事か！」

叫びすぎて疲れたのだらう、大きく何度も息をつくとき景正は窓の外に目をやった。

「あいつらに聞かせてやりたいわ」

外は彼の辞任を要求するプラカードと彼を罵るデモ隊で埋め尽くされていた。

議事開始のベルが鳴った。直江ははつと我に振り返襟を正した。

午後三時二十分、少年法改正法案の賛否を決める衆議院本会議の開会である。

それから三時間、法案に対する答弁が続いたが、犯人の目を恐れ、また「どうせ通過するのだ」、との考えがあつてか真剣な議論にはならず、さほど問題にならないささいな部分に集中した。八百長と評されても文句の言えないものだった。

答弁が終わった後はいよいよ採決である。採決は記名投票で行われる。民自党の議員が呼ばれ、議長席の下の投票箱へ順番に向かう。予定通り、出席した全民自党議員二百九名が賛成の白札を投じた。安田ら「維新会」の面々は、自らの戦略の布石と言うこともあり、犯人に屈したと言う気負いを見せず、堂々と白札を投じた。

公民党・民進党・社労党・共民党と五政党の議員全てが白札を投

じ、無所属議員の出番となった。

数時間前民自党を離党したばかりの議員が、緊張する右手を震わせながら反対の青札を投じる、四百二十九人目にして始めての青札に場内はどよめきともった拍手が鳴り響いた。

犯人たちに対するせめてもの抵抗と言うべきか、賛成議員たちは皆机に手を隠して叩いた。中には隠しているつもりでもカメラにしっかりとおさめられている者もいた。

(これでこの国の政治にまだ希望が持てる)

畠山は手を叩きながら反対を投じた彼らを羨ましく思えた。同じような思いを持っている議員は決して少なくない。

続いて真柄に率いられた旧公民党議員がはつきりとした足取りで青札を投じる。旧民進党議員も迷わずに投票箱を通過した。

しかし、永井ら旧社労党になって投票が止まってしまう。最初の永井ははつきりとした意思を持って反対を投じたものの、ほとんどの議員は永井に騙されたかつこう(本人たちから見れば)でこのような事態になってしまったため、青札を投じようにも覚悟が出来ないのだ。

離党後に自らの覚悟を決め、投票したのは半数で、残りは投票箱の前でおろおろしたり、そこへ向かうまでの階段で立ち止まって動かなくなったりと、情けない姿をさらした。

「なんだ、牛歩か？ 一体いつの時代の人間だ」

どこからかそう野次が飛び、会場はどつと笑いに包まれた。

圧巻なのは離党しながらも賛成の白札を投じてしまった議員がいたことである。

「お前は一体何のために離党したんだ!？」

野次や罵声や笑いから逃げるようにしてその議員は自分の席へと戻った。

午後八時五分、全ての議員の投票が終了した。

「賛成四百三十五、反対四十四。よって賛成多数により、少年法改

正法案は可決されました」

「うおおおおおーっ!!!」

会場に議員たちの拍手と歓声がこだまする。中には万歳をする者も、その歓声の中、直江総理代行は苦悩の表情で各党の議席の方向にそれぞれ一回ずつ頭を下げて退室した。反対を票じた議員は沸き立つ議員を押し分け、無言で去る者、「我々は負けん」と叫ぶ者さままであった。

その様子はテレビを通じて病室の景正の目にも入った。彼は直江に対して何度も手を合わせて頭を下げた。

そんな彼の目に大げさに万歳をする野上の姿が入った。勢い余って今にも後ろに倒れようとする野上、その姿は隣に無言で座っている畠山と比べて滑稽なものに映った。

議員たちの歓声は議事堂へと向かう神取の耳にも入った。彼はその歓声の意味する所を知って呆然としたが、

「まだ参議院がある」

と、人だかりを押しつけて直江の姿を探した。彼の右手には一枚のポスターが握られていた。

第二十五話 取り戻した希望

どれほどの人を掻き分けたらだろうか、議事堂に乱入してから三十分が経過していた。議事堂を後にする議員たち、それを取り囲む記者。神取はそれらの人ごみに構わず、一心に直江の姿を探した。右手のポスターが人に挟まれ何度も引きちぎられそうになったが、その都度両手で優しくそれを自分の胸元に寄せた。

直江の姿を発見したのは神取が何度目かに正面入り口に立った時だった。閉会直後の混雑は一応の落ち着きを見せていた。その中で、直江はコソコソと隠れるように歩いていた。

神取は直江の後を付けた。彼が議事堂を出たのを見ると、直江の腕を掴み、まるで拉致をするかのように強引に直江を車の中に押し入れ、秘書が入らぬうちにドアを閉めた。

「おっ、おい……」

秘書の制止も聞かずに運転席の角田刑事は車を走らせた。

車は警視庁についた。

「代理、降りてください」

神取は申し訳なさそうに頭を下げた。

「この時期にこんな強引な呼び出しを受けるとは……。なにか事件に進展があったようですね」

直江は少々不機嫌そうに服の乱れを直した。

「はい、本日衆議院を通過した少年法改正法案の参議院提出をしばらく控えてもらいたいです。もう一つ、今夜よりこのポスターを全国に貼り出すことをお許し願いたい」

神取は今まで大切に持っていたポスターを広げ、直江に見せた。

「……彼らが今回の事件の犯人だと言うのかね」

直江は心配そうに呟く。

「はい……、しかし私の思うところ彼らには黒幕がいます。彼らは

それに利用されているに過ぎないのです。ですから、まずは彼らの身柄を確保し、しかるに黒幕への手がかりになればと思ひまして」「なるほど……、だから彼らを失踪者として全国に公開するわけですか」

直江には神取の意図が読めたようだ。先ほどの不安げな表情からいつもの　記者たちを相手にしているような　表情に戻った。「すでに事件から一週間が経過しています。事件の関係者が行方不明者として捜索されてもおかしくはないでしょう。そして彼らが行方不明者として発見されても、であればこそなおさら黒幕たちは捜査が自分たちの手にまで及んでいるとは気が付かないはずですよ」

これは一種の賭けである。それに乗ってほしい、と神取は直江に必死に訴えた。

「どうでしょう、代行。私たちは何があっても一滴の血を流さずにこの事件を解決して見せます。そのためにはまず、彼らの確保が必要なのです」

直江は神取の話を受けてしばらく無言でポスターに載っている人物の顔を指で力強くなぞった。指を一回、二回と動かす事で、何か自分に気合を入れていたようだった。そしてしばらく彼は空を仰ぎ見た。相変わらず周りのライトのせいで空は灰色に映り、晴れているのか曇っているのか分からない。

「三日待ちましょう……。それが限界です。それまでに事件の捜査に何らかの進展……、少なくともこのポスターの人物を見つけていただきたい」

「はい、必ず居所を掴みます。それまで直江代理はもちろん、全ての議員の先生方、その家族は私たち警察が全責任を持ってお守りします！」

直江は目を閉じると心の中で呟いた。

(景正……、すまない)

ゆっくりと目を開くと不意に神取の持つポスターが目に入った。

その中の人物の一人、岡部幸成に自分は少し似ているな、と思った。

少年法改正法案衆議院通過の様子は、国会中継を通じてリアルタイムに全国に流された。その後も、少年法通過に関するニュースや、新しい少年法の解説など、M H K・民放各局はこの出来事の意味を必死に伝えていた。

そのニュースにこの国で一番喜んでいる人物は、今高らかに笑いながらベッドに仰向けになっている。

「何をそんなに嬉しがっているのよ。ここ最近で一番の上機嫌じゃない」

少し呆れ顔で里美が隼人に声をかける。

「これがおかしくなくてどうする里美。やはり人間は希望というものを捨てずに持つべきなんだな。俺は今日それをつくづく思ったよ」
笑いながら隼人は上体を起こす。

「なあ……、里美」

「なによ、最近のあんたは少し変よ」

「このままだと本当に少年法は改正されるぞ。この国の議員たちや警察どもは俺たちの思った以上に本当に馬鹿ばかりだったんだ」

笑顔の隼人に対して、里美の表情は険しくなった。

「あんた……、本気でそう思っているの？」

「ああ、そうさ。人間、希望を持って何が悪いんだ」

激しくベッドが軋んだ。里美がベッドに飛び乗り、隼人の腕を激しく掴んだのだ。

「やはりそうだったのね……。最初と言っている事が違うじゃない！『自分の事しか考えない政治家や弁護士たちを驚かすだけだ』って、言っていたじゃない。散々驚かしておいて彼女たちは解放するつもりだったでしょ」

激しく隼人の腕を振る里美、隼人は悪びれもせず answers。

「それは、俺は何もかも希望が持てなかったからだ。何をやっても上手くいくわけが無い。そう思ったからだ。だからこんな事をしたら絶対に捕まるって思っていた」

「『それでもこれだけの騒ぎを起せば国民は今の少年法がいかにおかしなものか、被害者と加害者の扱いがいかにも不平等か気づく、それだけでいい』って言っていたじゃない」

腕を振るのに疲れたのか、里美は言い終わると同時に腕を離した。情性で隼人の腕が彼の頭まで上がり力なく落ちた。

「この計画は俺が自分の将来に希望が持てなかったから考えた事だ。俺はいつも何かに希望を持つと、幸せを感じると直後に裏切られるようにそれを失ってしまう。二年前がそうだった。彩子という幸せだった俺はいつかこれが崩れるのではないかといつも脅かされていた。たけど四年たつても何も起こらなかった。だから俺は彩子といつまでもやっつけていけるとその日、初めて思ったんだ」

その報せは、里美からの電話で知らされた。彩子と別れた後、隼人は友人とカラオケボックスで朝まで歌う予定だった。幸い地下鉄はまだ動いていたので、隼人は急いで警察署へと向かった。

電車に乗っている間、彼は震える口元を、今にも飛び出しそうな嗚咽を右手で押さえるのに必死だった。その右手さえ、左手の支えがなければならぬ有様だった。周囲が彼を怪しむ目で見ていたが一向に構わなかった。いや、彼にはその人たちが見えなかった。

その証拠に、彼は里美が教えた駅に着いたのを知ると、ゆっくり歩く老婆を押しつけて階段へとかけたのだった。

警察署の薄暗い霊安室の前の椅子に里美が一人座っていた。

「里美……」

里美は隼人に気が付くと、何も言わずに彼に抱きつき、そのまま泣き続けた。ここで彼の記憶はしばし途切れる。次に彼の目に入ったのは霊安室の飾り気の無い白いベットの上で眠る彩子の姿であった。

どうしてこいつはこんな穏やかな顔をしているのに死んでいるの
だろう？ どうして苦しそうな、悲しそうな顔をしていないのだろ

う？

隼人は彩子をしばらく観察すると、彼女の頬をつねった。

「隼人……さん？」

里美の呼びかけにも応じず、隼人は彩子の頬をさらに引つ張った。口が開き、歯がだらしなく見えてもさらに引つ張り続けた。

「隼人さん、やめてよ」

里美が隼人の腕を払う。彩子の口が閉じられたが、ゆるみが残り、少し笑っているようにも見えた。

「もう何をしてもお姉ちゃんは目を覚まさないんだよ……」

里美の言葉を聞いてか聞かずか、隼人は彩子を再び観察した。十数秒後、彼は彩子の体に触れると、思い切り彼女を揺さぶりついにはベッドから突き落としてしまった。

起きない

「隼人さん!!」

物音と里美の悲痛な叫び声を聞いた警察や、病院関係者が部屋へと入った。

「何をやっているんだ、あんた！」

「落ち着いてくださいよ」

「お気持ちは痛いほど分かりますが……」

皆が口々に何かを言っつては隼人を部屋から出そうとするが、彼には何も聞こえず、頑としてそこを動かなかった。

やがて、彩子の白い手術着の胸の辺りがだんだんと赤くなっていった。隼人が落とした時に縫合していた胸の傷口が開いてしまったのだ。

その赤く広がるものを目にしたとき、彼は初めて彩子の死を知った。周囲の人間にされるがままに室外へと引きずり出された。霊安室の扉が重く閉まる。その音は元に戻った隼人の聴覚が初めて感知

した音だった。

「やはり俺の希望と幸せは失われてしまったんだ」

隼人は投げやりに語るとどっとベッドに転がった。

「それ以来俺は何をやっても決して幸せになれないだろうと思った。だからせめて死ぬ前に俺たちの、彩子の無念を晴らさなければならぬ」と思った。今回の事件はそのために起こしたものだ」

たとえ自分が捕まろうとも国民は現行の少年法に疑問を持ち、改正は避けられないものとなるだろう。そう考えて、同じ境遇の岡部一家や隆を仲間に加えたのだ。

彼らも隼人がそう考えていたからこそ、賛成したのだ。

しかし隼人はそのことに気づいていない。悲しそうに話す隼人に再び笑顔が戻った。

「しかし蓋を開けてみればどうだ、里美よ。このままだと本当に少年法が改正されるのだぞ。俺の願いは希望はまだかなうのかもしれない。俺は希望をまだ持っていていいのかもしれない」

隼人の笑顔に対して、今度の里美の顔は今にも泣きそうなものだった。

「この二年間というものの、俺はこの事件のために生きていたんだ。どうせやってもうまく行くはず無いがやれるだけの努力はしよう、そう思っただけ生きてきた。その結果がこれだよ。俺はまだ希望を持っているのだ。幸せになっただけいいのだ」

不意に里美が枕を激しく床に打ちつけた。隼人は大きく口を開けたまま、ポカンと里美を見つめた。

里美は無言で廊下へと出た。彼女の行動に首を傾げていた隼人だったが、やがてもう一つの枕に顔を押し付け、笑い出した。

里美はドアを背にすると、その場で中の隼人に気づかれないように精一杯声を押し殺して泣き崩れた。

「あたしと一緒にいても幸せじゃなかったと言うのね……」

そのような状態の二人であったから、神取と直江のやり取りはも

ちろん、ロビーで明美と直子が見ているニュースなど知る由も無かった。

「本日衆議院を通過した少年法改正案ですが……、直江代行の強引さに各党の参議院議員から反発が出ているようです。政府は明日中の参議院通過はとも無理だと判断し、しばらくはどの党も党内の調整に勤めると、先ほど直江代行直々の発表がありました」

第二十六話 夫婦の説得

神取の指示により隼人らの顔写真を載せたポスターは、夜を徹して全国に貼り出された。有名大学を卒業したエリートから、田舎の交番勤務の警察官までの総動員である。夜が明けた頃には首都圏・甲信地方では街のいたるところにポスターが貼られていた。各テレビ局は朝のニュースで隼人らを「行方不明者」として公表し、視聴者に捜索の協力を呼びかけた。

その効果は神取の予想以上に早く現れた。

午前十時、岡部夫婦は隼人を連れて山荘から一時間以上車で走り一番近いスーパーに着いた。昨夜の雪がまだ駐車場のフェンスに残っている。隼人はふと、その向こう側の湖を見た。風が無く波一つ立てないその水に隼人は重苦しさを感じた。その青の中に白い物体が一点、白鳥が自らの力でその水を動かそうと隼人の視界を横切っている。

「隼人さん、風邪をひきますよ」

政子の声に促されて隼人は店へと入った。

店員と客が次々に彼と夫婦を見る。その瞬間、彼の脳を薄氷にひびが入ったような音が突き抜け、両肩の筋肉が何者かに捕まれたかのように自由が利かなくなつた。周りが自分を受け入れていないという予感を彼はいつもこのように感じる。

(こいつら……)

隼人は周囲の人々を見回した。みんな目線をそらす。岡部夫婦は隼人や周りの異変に気づくことなく食材を選んでいる。事件発生から九日、その準備期間も含め食材の買出しは全てここで行っていたために、店員の中に夫婦のおなじみの人ができていたようだ。

夫婦と店員とのいつもどおりのやり取りの中で、隼人は店員に対する違和感を冷静に見つめていた。

そんな隼人の耳に主婦たちの会話が入る。

「あら、奥さん、あの青年じゃありませんの」

「まあ、写真で見るとより人相が悪いみたいですね」

「あそこにいる夫婦もあの写真の……？」

隼人はその会話を無視して岡部夫婦にすぐに店を出るようにと伝えようとした。

一歩踏み出したとき、視界の片隅に自分の顔が入った。正面からそれを捉える。

『この人たちを探しています。彼らはインターネットで知り合った自殺志願者たちです。数日前から音信不通となっています。どうか皆様の暖かい力で、彼らの命を助けて下さい』

そう書かれた見出しの下に隼人、里美、岡部一家、隆の六人の顔写真が載っていた。

「親父さん、おかみさん、早く」

隼人は二人の腕をつかむと、先ほどの主婦たちを押しつけ店外へと出た。三人の乗った車が駐車場を飛び出した頃、スーパーの店長は警察へと電話をかけた。「失踪者を発見しました」と、あくまでも彼らを行方不明者だと思っている店長は、その後の警察の取調べの激しさに舌を巻いた事であろう。

「隼人さん……、降ろしてくれないか……」

商店街を抜け人通りが無い寺の裏の路地でやっと事情を知った政也が隼人にこう訴えた。

「親父さん……」

「警察はもう、私たちのことを知っているのですよ。ほら、あの電柱。こんなところまで私たちのポスターがある。今日の買い物で村中の人々が私たちのことに気づいていると思います。私たちが警察に出頭して時間を稼ぐから、その間に山荘に戻って彼女たちの解放を考えて下さい」

隼人はハンドルを激しく叩き叫んだ。

「いや……、絶対にそうはさせない。もうすぐなんだ！ 少年法改正案は衆議院を通過した。参議院の通過もあつと言う間だ。俺たちの本当の願いが俺たちの手でもうすぐ実現する。改正のための捨て石と自らを決め付けていた俺たちだが、もうすぐ俺たちの手で改正が実現されるんだ！」

ハンドルを手に握ったまま、隼人は後ろを振り向き口元を震わせながら夫婦の顔を見つめた。

「だから俺たちは捕まるわけにはいかないんだよ……」

政也は力強く、隼人の右拳を叩き、そしてそつと包んだ。

「いえ、隼人さん。だからこそ私たちは捕まらなければなりません。目を大きく見開き何かを言おうとする隼人を政也は手で制した。

「確かに私たちが逃げ切れればもうすぐ少年法が改正されるでしょう。しかし犯罪者に脅されてできた法律など誰が信じようとするでしょうか。必ず少年法は元に戻されます。そして二度と改正されることは無い。国民は私たちの犯罪に恐怖を覚え、面子をつぶされた国会議員は深い屈辱を覚える。そんな人たちがとても私たちの要求する改正案を自ら作るうとは思えない」

太陽の光に溶かされた林の雪が木の下へと落ちる。その水滴の鮮やかな音は車内にもかすかに入り込む。

「だから、今捕まるべきなんです。昨日通った改正案は廃案となるでしょうが……。今ならまだ私たちの訴えに耳を傾けてくれる人たちがいる。少年法について真剣に考えてくれる人たちがいる。時間が経てば経つほど人々の心の中には私たちの訴えは消え、私たちへの恐怖と恨みしか残らなくなる……。だから、今捕まるのです」

「隼人さん、これはあなたが最初に私たち家族に言った事ですよ。頭をうなだれた隼人が自分の右手を包む政也の手をもう一つの手で激しく叩いた。

「しかし……、俺はもう終わりたくないんだ。捕まるなんて、捨て石なんかで一生を終わりたいくない。幸せになるんだ。取り戻した希望を大切にしたいんだ。そのために自らの願いをこの手で実現する

んだ」

政也がさらにながつちりと隼人の手を抑える。

「たとえ今捨て石になっても、将来、少年法が改正されれば、それは自ら願いを実現した事になりませんか？ あなたが私たちに最初に提案した事こそ隼人さんの将来の人々に対しての希望と信頼に満ちたものだと思っています」

隼人の手の力が抜けた。先ほどから続く雪の滴の音は、力なく、しかし確実に彼らの車の中へ、そして彼らの耳に入っていく。

「好きにしてくれ……」

隼人はそう言うのと車のロックを解除した。

「隼人さん……、必ず彼女たちを解放するんですよ」

力強く声をかける政也に隼人は首を横に振った。

「それとこれとは話が別だ」

「隼人さん！」

滴の音が遠くのサイレンの音に掻き消されていく。

「あなた、早く行かないと。隼人さんまで巻き込まれてしまいますよ」

政子が政也の肩を力強く動かす。

「ねえ、隼人さん。あの子たちは確かに政治家さんの家族だけど、あの子自体は何も悪い事はしていないのよ。その子たちの命を奪うなんて……、何も悪い事をしてないのに命を奪われるなんて……、私の息子や彩子さんと同じじゃない。そんな人たちを少しでも減らそうと少年法を改正させるのでしょうか？ そんな私たちが自らそういう人たちを増やしてはいけませんよ」

サイレンの音が近づいていく。政子は今まで隼人に見せたことのない力で政也を車外へと引っ張り出し、ドアを閉めた。

「隼人さん！ 必ず彼女たちを帰すんだ。それこそがあなたや私たちが望む少年法改正の一番の近道になるんだ！」

その言葉は必死でアクセルを踏む隼人にとってはずでに遠いものとなっていた。

(俺は幸せになりたいんだ……。その願いがかなわないのなら……。また希望が奪われるのなら……)

サイレン音を逃れながら隼人が山荘に戻ったのは昼の三時を過ぎた頃だった。隼人が車を降りたその時、その音を聞いたのか里美が飛び出してきた。

「……、一体どうしたというのよ。まだ食材は一日分残っていたくらいいけど……。あなたのお昼ごはんはもう無いからね。あっ、でもおじさんとおばさんの分は……？」

昨日のこともあってかいつもより機嫌が悪そうに毒づく里美だったが、車から降りてきたのは隼人一人だと言う事に気づいた。

「あれ、おじさんやおばさんはどうしたの」

隼人は無言でその場に立ったままだ。しばらくたつて何かを言うとしたが、すぐに言葉を引つ込める。それを数回繰り返した。最初はイライラしていた里美だが、だんだんその意味するところが分かってきたのか、表情が暗いものとなっていた。

近くの木が雪の重みに耐え切れず、持っているものを全て落とした。その音をきっかけに隼人が

「里美……」

やっと言葉を発した。

「終わりにするぞ」

第二十七話 六人の犯行

時間は四時を過ぎた辺りだろうか。名古屋西警察署に一人の男が現れた。その男は入り口を守る警察官に一礼をすると、

「これを総理官邸に届けてもらえませんか」

と数枚の原稿用紙を渡した。渡された警察官はいぶかしげにその文面を眺めていたが、さっと表情が青ざめ上司の名を叫びながら中に入った。それから数分後彼は大勢の警察官に取り押さえられるがなんら抵抗もしなかった。

男の名は、後藤隆という。

奇しくも時刻は彼が事件の発生を伝えた午後九時であった。

直江信太郎総理代行は報道陣を官邸に呼び出し、口を開いた。

「本日午後四時八分、名古屋西警察署に今回の誘拐事件の犯人の一人と見られる男が出頭しました」

報道陣にどよめきが起こった。直江に呼ばれこの席にいた神取も思わず目を見張った。

「男は十八歳の無職の少年であり、彼は犯人グループのリーダーの男からの伝言、原稿用紙にして数枚、を持って出頭してきました」

再びのどよめき。直江代理をカメラのフラッシュが激しく襲った。彼は間を置くと、その伝言を読み上げた。

「我々は、少年法改正を目論んで今回の犯行におよんだわけであるが、警察の追及厳しく、既に我々の身元は判明され、仲間の二人が本日昼近くに警察に捕らえられたのを考えると、到底少年法改正案の成立までに我々は逃げ切れぬと判断した」

三度のどよめきは悲鳴も混じっていた。これには直江も神取も驚いた。二人は岡部夫婦の出頭など知らされていなかったのである。事実岡部夫婦は隼人と別れた直後、警察に出頭した。

しかし、捜査官が何時間追及しても事件について何一つ語らなか

つたため、地元の警察署は人違いの疑いもあるとして県警や警視庁に連絡をしなかった。

「人質の命はどうなるんですか!？」

記者の一人が絶叫する。直江の口が止まった。神取は顔を青ざめ頭を抱えた。警察の追及と、自らの計画の失敗を犯人に悟られたと言ふ事は、人質の死を意味する。

(この私の勘も、すでに老いたということか……)

神取は全身を震わせながらも意を決した。カメラの前で自ら名乗り出て土下座し、捜査の不手際を謝罪する。彼は立ち上がるうと両膝を大きく叩いた。

「人質の処遇については」

と一言置いて直江は一瞬、神取を見た。

(早まるな)

直江の無言の言葉が通じ、神取は浮かしかけた腰を元に戻す。

「一時は全員の殺害を思い立ったが、それではこの国の国民全員の批難を買い、この事件をきっかけに私たちが国内に起こした少年法改正の機運を失うことになる」と判断。我々は断腸の思いで明日の夕方、国会議事堂前にて全員を解放することに決定した」

読むにつれて、直江の声と表情に驚きと喜びがそのまま現れた。

記者たちもそれぞれ思い思いの声を上げる。神取にとっては地獄から天国へ上れる糸を見つけた気分であった。

直後に直江の顔が再び緊張する。

「しかし、解放に際していくつかの注意点を伝える。これが守られない場合は人質の解放は無い、即刻殺害する」

報道陣や神取に緊張が戻った。天国へはそう簡単に上れない。

「一つ、明日の一日中、中央高速自動車道の上下線とも甲府南インターチェンジより東京側と首都高の全線は、通行止めとすること」

「二つ、我々の車は高速道路を通り、国会議事堂にいたる。我々の車はインターチェンジに近づいたら発炎筒を用いてそれを知らせるため、警備の者はすみやかに通すこと。車は二台、それ以外は警護

の車を除いては入れてはならない」

「我々マスクミの車もですか？」

記者の一人が手を上げる。直江は続きを読むことでこれに回答を与えた。

「三つ、国会議事堂にいたるまで、警察・マスクミはこれを妨害しないこと」

「四つ、解放の様子を各マスクミは生放送で公開すること。移動中の様子に関しては、ヘリコプターでの中継のみとし、車での中継は許されない」

記者たちはほっと胸をなでおろした。車ではなくても中継はできる。

「五つ、政府はこの伝言を本日午後十一時五十九分までに全国に全て報告すること」

「最後に……」

と読み上げる直江の口が再び止まり、手が震えた。神取の方を一瞬見た直江は、気を取り直して口を動かす。

「最後に一部のマスクミでテロ組織や巨大な犯罪組織の犯行と伝えられているが、犯行グループは既に捕らえられた者を含めて全部で六名、全国に貼り出されたポスターに顔を載せている六名全てである。明日、この残りの三名が全員出頭するので、政府、議員、マスクミ、弁護士団体、国民の皆さんは安心してほしい。以上、二月七日、藤田隼人」

記者たちが全員立ち上がり、質問を直江にぶつける。彼はこれを大声で静めた。

「これが伝言の全てです。皆様の質問、疑問等は私は一言もお答えする事ができません、一切受け付けません、ただ今お伝えした事が、全てです」

直江が部屋を出ると、記者たちは一斉に動き出した。マイクを持ってカメラの前に立つ者。上司へ電話をかけ、大声で会見の内容を伝える者。ペンを折らんばかりの勢いで手帳に書きなぐる者。

それらの全てがいなくなった後で、ただ一人残された神取はやつと腰を上げた。

「六人だけか……。岡部さん……。あなたがいたから人質の解放の決断ができたのでしょうか……」

一人つぶやいて少し笑みを浮かべると、彼は職場へと戻った。

第二十八話 幸せの責任

山荘での最後の晚餐、岡部夫婦がすでに身柄を拘束されているため料理は浩子たちが自分で作るようになった。メニューは自然にカレーと決まった。

人質になった少年少女と里美は、里美が優しく接していたため、山荘で過ごすうちに互いに打ち解けあい、その日の夕食も笑顔をかわしながら話していたが、いつも無愛想に食べていた隼人はこの夕食には姿を現さなかった。

里美と浩子、明美、直子の四人は調理場に残り、後片付けをしていた。

「……今まで、ごめんね。こんなひどい目に遭わせて……」

不意に里美が三人に謝った。

「そんな……、謝られても……。こういうの変かもしれないけど最初は怖かったけど、私はそれなりに楽しかったですよ」

と浩子が慌てて里美を慰めた。お世辞の部分もあるが、本当の部分もある。

「そうですね、確かに悪いことはしたと思うけど、里美さんは私たちにはすごく良くしてくれたじゃないですか。小さい子供達だって最初は怯えていたけど、本当に楽しそうに里美さんと遊んでいました……」

皿を拭きながら、直子が続いた。彼女は小さい妹が二人いたため、山荘の中でも小さい子供たちの相手をしていた。子供たちと遊ぶ里美の姿も何度か見ていた。

「ありがとう……」

里美は涙をこらえながら三人を見た。

「あたしがこう言うのもなんだけどさ、これからあなたたちにはいろんな事が起こると思う。ひよっとしたらこれ以上の事もあるかもしれない。でも……、頑張って生きてね。……あたしたちの分まで」

最後のほうは聞こえないようになり小声で言ったのだが、三人にははつきりと聞こえていた。

「なぜそんなことを言うのですか？里美さんだって……」

「……あたしはもう終わっているのよ。二年前に、お姉ちゃんがあるひどい殺され方をして……、お姉ちゃんであんな目に遭うなら私はこの世で生きていてもろくな目に合わない、絶対に幸せにならない、そう思ったのよ」

明美が里美の発言に反論する。

「隼人さんはどうなんですか！ 隼人さんは里美さんの彼氏でしょう？ 里美さんが隼人さんのことを話すときはすごく幸せそうな顔していたじゃないですか？ それでも幸せじゃなかったんですか」

「あの人とはね……」

と里美は三人に背をむけて、皿を棚に片付けながら呟いた。

「たぶん……、二人とも同時にお姉ちゃんを失ったというシヨックを受けてからじゃないかなと思う。同じ悲しみを共有しているもの同士傷を舐めあつたつてやつ？ 私はそうしているうちに本当にあの人といて幸せだなあって、思ってきてさ。だから今回あの人がこの事件の計画を建てたときに、彼女としてどこまでも付いて行こうと思っただけ……」

里美は棚の扉を力なく閉める。

「でもあの人は違つたみたい。私といっても幸せじゃなかったみたい。たぶんおねえちゃんに良く似た人、この計画の仲間。ただ一緒にいると落ち着くからとしか見てなかったみたい。昨日ね、そう気づかされたんだ。そしたら、今までのあの人の彼女で幸せだった時間が嘘のように思えて……、結局私もあの人と同じ、二年前に終わっていったんだな、って。」

本当に強く生きてね。と、悲しく言う里美。浩子はこのままではいけないと、思つたことを口に出した。

「でも……、里美さんは隼人さんについて本当に幸せだったんでしょ？ 隼人さんがいたから……、里美さんは幸せに生きて来たんでし

よ。お姉さんの死の悲しみにつぶされなかつたんでしょ」

「そうね……、でも昨日それが全て嘘だったって気づいた」

里美が悲しく笑いながら振り向き、次の皿を拭こうと流し台へと変なりズムをつけながら歩く。

「嘘じゃない、幸せだったから今の里美さんがいるんでしょ。それは事実じゃないですか。隼人さんがいたから里美さんは今まで幸せに生きてこられた。そして今の里美さんがいる。隼人さんもきつとそうだと思います。隼人さんはそれに気づいていないだけ、ならば隼人さんもこうして生きていくはずがない！」

そう言える根拠は何もないが、浩子とはにかく断言しなくては、と思った。

「気づいてないだけか……、私が彼をなんとかできるのだろうか……」

「できます、きつとできます！」

と、里美を後押しする浩子。しかし里美はあることに気づくと乾いた笑い声を出した。

「……、馬鹿みたい。今さらそんなこと気づいて、気づかせてどうするんだらう。今を認める？ 犯罪者の私を？ 犯罪者である自分を認めてどうするのよ……。私たちはそんな人間が苦しむような法律を作るために、こんなことをしたと言うのに……」

力なく里美は座り込んだ。笑い声がだんだん涙声へと変わっていき。

「それは違います」

明美が里美の肩をそつと優しく叩いた。

「私のお父さんが言っていました。『刑務所に入ったからってその人の人生が終わったわけではないって、確かに犯した犯罪は許されないけど……、その人の将来は可能な限り許されるようにしたい』って、犯罪者の中には、里美さんのように追い詰められてしまうがなくてしまった犯罪者がいる。そういう人たちに人生が終わったと思っほしくない。だから私のお父さんは弁護士をしているの

です。……最もお父さんが助けた犯罪者の中に、私でも許せないような人間もいるのも事実です……。それでも、そんな人でも人生を良い方向へ変えることができるのだろうかとお父さんはいつも悩んでいます……」

「とにかく、里美さんはまだ終わってないですよ。いえ、終わっちゃいけないんです。私たちがなんとか罪が軽くなるように証言しますから……。里美さんも、隼人さんも、これで終わりにしないで下さい！」

明美が頬を涙で濡らす。里美がそれをそつと撫でた。

「……、なんでかなあ……。私、今まであなたのお父さんたちのこと、ほんと大っ嫌いで恨んでいたのになあ……。その言葉を聞いただけで……」

里美が何度撫でてでも明美の頬は涙に濡れる。里美も涙で頬を濡らし、服の襟には涙のしみができている。

「里美さん、ここは私たちがやりますんで、隼人さんのところへ行ってください」

浩子がロビーへの扉を開ける。

「……そうね……。彼も終わらせたくないもの。」

三人に見送られ、鼻をすすりながら自ら気合を入れてロビーへと出た里美だったが、調理場からの直子の声にさっと顔を青ざめた。

「あれー？ 包丁が一つ足りない……。いつもは二本あるのに二本しかない。」

「それは本当なの？」

嫌な予感がする。里美はたまらず調理場へと戻った。

「はい、私はおじさんたちの料理の手伝いをいつもしていたので間違いありません」

「……まさか！」

里美の嫌な予感が三人にも伝わった。四人は蛇口が勢いよく水が流れているのも気にせず走り出した。

隼人は正座をし、包丁を手に持ちながら考え事をしている。時にはそれを首の辺りに持って行ったり、腹を叩いてみたり。

「隼人！！」

飛び込んできた里美たちに「ああ」と彼は声をかけるだけだった。

「あんた一体何をしているの？」

「隼人さん！？」

隼人の異様な行動に驚く四人に対し隼人は

「自分の死の方について考えていたんだ。どう死ねばますます俺たちの思いが国民に印象付けられるかなあ、事件の風化を防げるかなあ、つて」

自分が今読んでいる本について語っているかのように平然と答えた。

「死ぬなんて馬鹿なことやめてよ！」

里美が悲痛な声を上げる。

「いや、最初から事件の最後はそうするつもりだったから。少年法が衆議院を通過したときは変な希望を持って、なんとして改正させると意固地になったが。やっぱり俺はダメだ。もう俺は幸せにはなれん、人質も殺せぬ情けない奴だし、自らばっさりと死ぬわ」

「本当に幸せになれないと言うの？ 今までも幸せじゃなかったというの？」

里美の問いに隼人は顔を上げて天井を見つめていたが。

「たぶんな」

と、里美の方を見て言った。

その言葉を聞いた里美は隼人の右拳を踏みつけるように蹴った。包丁が隼人から離れ床を滑る。浩子はその刃の部分で足でしっかりと押さえた。

「おい、返せよ……！！」

と立ち上がる隼人だったが里美に突き飛ばされ、ベッドに仰向けに倒れた。

「??？」

訳が分からず呆然とする隼人に里美が乗りかかる。

「幸せじゃない!? 馬鹿言ってるんじゃないよ。二年間のあたしの思い出はなんだったと言うのさ!」

「あたしがいなくなったらいつまでもお姉ちゃんの悲しみにつぶれてこんな計画も思いつかなかつただろうに、偉そうなことを言ってるじゃないわよ! こんな馬鹿なあんたでもね! あたしは幸せになつたんだよ。あんたについて幸せだった人間がここにいるんだよ」

大粒の涙を隼人の顔にぶつけながら里美は叫び続ける。

「どう責任取ってくれるのさ! 幸せになったあたしに! 責任とつてよ! 責任も取らずに死ぬなんて絶対許さないから」

里美が隼人の襟首をつかむ。隼人の首が大きく揺れる。

「あんたも私という幸せになりなさいよ! 責任取って幸せになりなさいよ! あんたが私より長く刑務所にいようが構わない、どんなに情けない目に遭っても私はずっと愛してやるから、死ぬなど言わずに幸せになりなさいよ!」

里美の手がはたとやむ、目を回しかけながら隼人は里美に尋ねた。

「お前……、俺のおかげで幸せになれたの言うのか?」

里美は「うん、うん、」と何度も頷く。

「そうか……、幸せか……、俺も幸せになっていいのか……? おまえらはどうなんだ?」

隼人は里美に、続いて浩子ら三人に問いかけた。

三人とも無言で頷く。

「そうか……、まだ俺は幸せになっていいんだなあ……」

里美の手が隼人の襟を放すと隼人は再びベッドに倒れた。

「そうか……」

不意に隼人は立ち上がり、窓を開け手すりに立った。

「隼人!!!」

「大丈夫だよ。下は雪が積もっている。死にやしない。」

そう言うと隼人は大の字になって飛び降りた。

四人が窓の外に身を乗り出すと、隼人が新雪の上につつ伏せにな

って倒れている。

「嫌だ！死なないで」

里美の叫びに死んでいるわけがないだろう、と言わんばかりに隼人が頭を上げた。それを見て四人はほっとした

「ちくしょーっ！！！」

と隼人は立ち上がり、大声で叫んだ。

「絶対に生きてやるぞー！！」

掴めるだけの雪を掴んで彼は様々な方向へ投げる。

「絶対に生きてやるぞー！！」

里美もそう言いながら飛び降りた。隼人とともに雪を思い切り投げる。

二人が雪を投げている相手が誰であるか、浩子はなんとなくわかるような気がした。

第二十九話 帰りを待つ者たち

人質が解放されるという報せは一夜明けでもニュース番組をにぎわせていた。犯人の身元は未成年の隆を除いた全員が全国に公表された。

（私は間違っていたと言うのか……）

朝食を取りながら犯人の名前をテレビで知った弁護士田原貴男は、持っていた牛乳を落とした。彼は犯人の全員が自分が担当した事件の被害者である事を覚えていた。そして、昨夜警察からの連絡ではつきりしなかったこと。娘の明美がさらわれた理由もはつきりと分かった。この事件は自分が招いた事であり、その復讐のために娘だけではなく国民全員を巻き込んでしまったのだと彼は自責の念に襲われた。

「どうしたの？あなた」

「由起子が……」

貴男は妻に聞いた事、自分が考えた事を全て話した。

「私のせいで明美が……明美がこんなことに……」

自分の過去を反省して下さい

あの日の隼人の言葉が蘇る。その苦悩も妻に話した。

「それであなはこれからどうするの？」

貴男の話聞いた由起子は夫に問いかけた。

「これからって……」

「田原貴男は弁護士として働きました。弁護士としての職務を全うしました。しかし人の反感を買い、娘が誘拐されてしまいました」

貴男は由起子が何故そんなことを言うのか分からず、ぽかんと口を開いた。

「……だからといって、あなたは今まで自分を捨てるの？ そりゃ生きていれば悪い事をしなくなつて嫌われることや反発を買う事はあるわよ。そのたびに……。あなたは自分を捨てて生きていくとい

うの？」

「由起子……」

「あなたはただ裁判に勝つためだけに被害者の家族を苦しめるために弁護士をしているわけではないでしょ。少年少女たちのことを将来のことを本当に考えて弁護士をしている。ズルイ事などせず、真面目に彼らと向き合っている」

貴男は無言で頷いた。

「ならいいじゃない。あなたはやましい事を一つもしていないんだもの。反感を買ってもひるむ事などないじゃない。明美もそれをちゃんと理解しているでしょ」

貴男は年上の妻に泣きながら抱きついた。一人の弁護士は子どものような声を上げて泣き出した。

「ただ…、これからは他人の意見をよく聞きましょうね…。」
妻の由起子がそつと優しい言葉をかけた。

社労党の党首安藤陽子は料亭で一人の男と会食していた。今日娘が無事解放され、彼女は党首を辞任する。

「安藤君……。いよいよだな……」

「永井先生……。本当によいのですか？ 反対した四十四人、この人数で党を興せば…、…社労党はもちろん、公民党も抜いて第三党になれるというのに…。」

陽子の言葉に永井は手を横に振った。

「たった一つの政策の意見が同じなだけだ。所詮それ以外の主張や政策が異なった人間。集まったところで烏合の衆に過ぎぬ」

さわやかに答える永井。更に続けて。

「離党した議員はそれぞれの党に戻るそうだが…、…社労党は今回の騒ぎで人数が減ってしまった。しかし私は少数精鋭が性に合うよ。うだ。何も考えぬ議員だけが無意味に多くいるより、この国を党の理念を本当に考える少数の人間の方が言葉としての力がある」

「永井先生…、社労党をよろしく願います」

永井が席を立とうとしたとき、陽子は彼に頭を下げた。

「安藤君……。君はこれからどうする」

永井の問いに彼女は頭を上げた。

「はい、教師に戻ろうかと思えます。一人の教師として、母親としてこの国を見守るつもりです」

さわやかな彼女の笑顔に一筋の涙が流れていた。

永井との会食後荷物の整理を済ませ、社労党本部を出た陽子は車の中から声をかけられた。

「朝倉先生……」

窓から手を振っていたのは公民党党首朝倉治夫だった。

「聞きましたよ、安藤先生。次は永井先生だそうですね。安藤先生の時代は穏やかで済んだが、永井先生は激しい議論がお好みの人です。これは与党としては大変な事ですね」

と言いながらも「あつ、そうか」と彼は頭を掻いて。

「その時私は党首も議員も辞めて女房とどこか旅に出ているのでした。」

「朝倉先生もそうですか……」

治夫はええ、と頷いた。しかし彼からは党首を辞めたという無念さが感じられなかった。

「次の党首は河合幹事長かわいがなります。離党した真柄君には国対委員長になってもらおうかと密かに打診しております」

「彼なら何とか永井先生に太刀打ちできそうですね」

二人はこれからの自分のことについてなどを話しながら議事堂まで歩く事にした。暖かな日の光の中を車で移動するのはもったいないと思ったのだ。

「そういえば、民進党は大西党首で続投するようですね」

「『事件の混乱を収め、再発を防ぐ方法を考える事が党首としての責任である。』と言っています。全員がいなくなるより、一人くらい事件の当事者が残っていても良いのではないのでしょうか」

自分の進退にしつかりとした決断をしたせいか、普段は気になる他党の動向もただの会話として通り過ぎる。

「おや、お二方も歩いて議事堂ですか」

相変わらず髪と服装がしつかりとした共民党党首の熊沢健が交差点で信号待ちをしていた。目の前は国会議事堂だ。

「私も議員を辞めるのですよ。後は兄の焼鳥屋の手伝いをしようかと思えます」

「熊沢先生が作る焼き鳥は身の一つ一つがどれも同じ大きさなのでしようね」

与党の党首として激しく健の政策と対立していた治夫が穏やかな冗談を飛ばす。

「いやいや、きっちりしているのは政治家のときだけ結構ですよ。」

まあ焼き鳥なんて適当に鶏肉を刺して焼いてりゃいい、って言うては兄に叱られますが」

健も笑いながら答える。

信号が青に変わり三人は一斉に歩き出した。健が何か思いついたようで二人に大声を上げた。

「そうだ、今回の事件が解決したら私の兄の店に来ませんか？ お代はいりません。私のおごりです。なあにもうその時は党首でも議員でもないんだ。領収書だの収賄だなどだれもうるさく言わないでしよう」

二人は快く賛成した。

景正は病室で直江の訪問を受けていた。

「直江……、見ていたぞ……。苦勞をかけたな」

景正の表情には安堵の色が出ていた。

「怪我の功名というか、党内が分裂してくれたおかげで法律の成立を阻止できた。党がまとまっていたら……、改正少年法は今頃参議院を通過していたらろう……」

景正は少し自嘲的な笑みを浮かべた。

「これも私の政治力の無さだな……。しかし浩子が無事でよかった」
党内が改正案について分裂したと聞いた時、景正は悲愴なる覚悟を決めた。参議院とはいえこのまま党がもめ続けたのなら浩子の命は無い。浩子が死ぬときは自分も死ぬときだと 総理の責務を放棄したあげく、大切な家族を守れなかった”最低の総理”としての死 。を迎えるときだと。

事実彼は「党内分裂」のニュースを見た後、自殺を考えようかと病院内を彷徨っていたところを看護士に発見され、事なきを得たのである。

「まだお孫さんが死ぬと決まったわけじゃありません！ あなたが死んだら彼女がどんな悲しい思いをするか！！」

そう説得され、景正はなんとか病室へ戻ったのだ。

景正から話を聞くうちに直江は体を震わせ、ついに耐え切れずに両手を激しく床に打ちつけた。そして膝を屈し、深々と頭を下げた。

「直江……？」

驚く景正に直江は叫んだ。

「すまん、景正。あれは嘘だ。党内分裂、各党の参議院議員の反発など全く無い。あれは全部私が犯人逮捕の時間稼ぎのために仕組んだ事なんだ」

神取のやり取りを含めて、事の一部始終を話している間、直江は一度も顔を上げなかった。

直江の話を聞いている間中、そしてその後も景正は直江の方を見なかった。直江もそのままの姿勢であった。そのまま数分が経過して、景正が口を開いた。

「過ぎた事だ……。直江。お前のおかげで少年法は改正されず、浩子は助かるのだ……。やはり、私の考えは間違っていなかったようだな……」

「景正……？」

直江がやっと顔を上げた。景正の考えとはなんだろうか。

「そろそろ来る頃だ」

景正が枕もとの時計を見る。数分後に扉の叩く音がした。
「どうぞ」

景正が声をかける。直江は慌てて立ち上がった。入ってきたのは安田誠幹事長と、畠山義輝前総理だった。

「私と呼んだのだ。私の後任の総理を決めようと思ってな」

「後任の総理？ そんな話は聞いてないぞ」

直江が間抜けな声をあげる。

「今から君に話そうと思ったところだ。畠山先生」

うむ、と畠山が頷き、大きな咳払いを一つしてから。

「次の総理大臣は直江信太郎君、君に決定した。すでに党内の各派閥の長からの了承を得ている」

直江が呆然とする。畠山の隣で何も知らされていなかった安田も目を見張った。

「君は上杉内閣の女房役として立派に職務を果たした。今回の事件も総理代行としての君の活躍のおかげで解決に向かおうとしている。上杉君には残念ながら事件の責任を取って辞任する事になるが、君なら上杉君の政策を引き継いで実行に移してくれるだろう」

「おい、景正……！？」

直江は驚きながら長年の盟友に詰め寄った。

「ずいぶん前から考えていた事だ。やはり総理の座は私より君のほうがふさわしい」

「そんなことを……」

まだためらう直江の手を景正はしっかりと握った。

「君しかいないのだよ。この国を事件の混乱から立ち直らせるのは納得のいかない顔で二人を見ている安田に畠山が声をかけた。

「君には国土交通大臣になってもらおうと思う」

安田が驚きの表情を畠山に見せる。畠山は笑いながら。

「君の政治の理想は素晴らしいものだが……、どうも法律以外は疎いと聞いている。もっと他の分野の事を学んでみたらどうかね。…

…あと、君の理想は少し国民に厳しすぎるなあ……。やたらにその

理想を広めたがるのも他党だけではなく内部からの反発を買う」

畠山は安田の肩を叩きながら。

「君はハムラビ法典と言ったが今はその時代からすでに何千年も経過している。ハムラビ法典より進化した国の治め方、政治のやり方を学んでみないかね。」

最後は小声で励ますように呟いた。

「そうすれば総理の座も廻ってこよう。上杉君もそれを望んでいる」
安田は自らの政治家としての力量と能力がこの三人とははるかに及ばない事を知らされた。

「直江……、浩子を迎えに行くぞ」

直江が大きくうん、うん、と頷いた。

病室に暖かな光が差している。暦の上ではもう春だ。

その頃、隼人たちの車は高速道路を東へ進んでいた。その中で隼人と里美はかつて彩子の十八番だったあの歌を一語も間違えることなく歌っていた。

最終回 議事堂から見る空

隼人たちの車は首都高速自動車道に入った。その事は車の後ろを警護するパトカーから無線を通じて議事堂を守る神取たちに伝わった。

「いよいよですね……課長」

角田刑事が緊張の面持ちで神取にお茶を差し出す。

「岡部さんが車に乗っていないのは残念だ……。なぜこんな事件を起こしたのか話を聞きたかったのに……」

息を吹きかけることも無く、神取は一気に飲み干した。勢いよく手に持った紙コップを投げつけようとしたが、公共の場である事を悟り、そのまま握りつぶした。

「大丈夫ですよ、この後も話せる機会はきっとあるはずですよ」

「そうだな……。一課を離れてしまえば難しくなるだろうがなんとか上司にお願いして私が直接取調べをしたいものだ。」

昼には暖かな光を送り続けていた太陽はすでに西の空へと沈んだ。街の気温は下がっていく一方なのに、この議事堂の前だけは時間が経つに連れて被害者の家族、警察、政治家、報道陣、野次馬などが集まり、その体温と吐く息で温度が上がり続けている。

神取は角田にお茶を頼んだ事を少し後悔し、上着を脱いだ。

「神取課長、この事件の後は刑事部長への昇進が内定したそうですね、おめでとうございます」

どこからその話を聞きつけたのか、刑事や警官たち　しかし、一課の人間ではない　がそれぞれに彼を囲い口々に同じ事を言う。本心からお祝いを言っている者もあれば、そうでない者もいる。神取にしてみれば、そういう人間の選別など簡単だった。

「勝手に持ち場を離れては困る！」

神取が一喝した。周りを囲んでいた刑事たちは彼の部下を残して怯えるように配置へと戻った。それにより神取の視界が少し開けた。

僅かに見える開かれたゲートを彼はじつと見つめた。車が現れるまで、一步も動く気は無い。

二十分後、車はついに国会議事堂の前に着いた。二台の車の周りをたくさんの人が取り囲んだ。正面ゲートを少し過ぎた辺りで、政也らが乗るワゴンが停止した。これは隼人たちの車を少しでも議事堂へ近づけるために野次馬を引きつけるための作戦であった。

大きな歓声と共に、ワゴンの周りには大勢の人が詰め寄った。ドアが車内から開けられると、直子ら四人の人質がその人々の中へと消えていった。程なくして、政也もその中へと飛び込んでいった。

浩子はその様子を最後まで見る事ができなかった。後部座席から後ろを見ていた浩子は不意に助手席に頭をぶつけた。里美が車を止めたのだ。

「着いたぞ」

浩子は隼人の方を向く。隼人が親指で示したその先には祖父の景正の姿があった。

(少しやつれたな……)

再開の喜びと自分のためにどれだけ苦しんだ事かという思いに、浩子は胸が熱くなった。

「とうとうお別れか」

運転席の里美がエンジンを切り、シートベルトをはずすと、助手席の明美にもそれを促した。

「じゃあ隼人、あたし先に行くね」

いつにも増して里美の声は元気だった。

「ああ、ずっと待っていてくれ。」

「うん」

隼人の返事に笑顔で応えると、里美は明美を見て大きくうなずいた。

そして二人は同時に外へと飛び出した。

「今、車の中から二人の女性が出た模様です。容疑者なのか、人質

なのか……、確認できません！」

どこからか女性アナウンサーの苦しそうな声が聞こえる。浩子は顔を左右に振り二人の姿を探したが、すでに見えない。

「俺たちも出るぞ」

浩子は隼人に引かれ、外へと出された。

(暖かい……、やっぱり山とは違うわ……)

浩子を囲む周りの空気を彼女はこう感じた。

「浩子！！」

名前を呼ばれてはっと我に返ると、目の前に景正がいた。

「おじい……」

ちゃん、と叫んで駆け寄ろうとしたが、隼人が彼女の腕をしつかりと掴んでいる。

「総理……、お体の具合はどうですか」

少し笑みを浮かべて隼人が景正に尋ねる。景正も微笑し、「君たちにやられるほど私は弱くないよ」

その後、両者は微動だにせず互いを見つめた。両者の間を割って入るものは誰もおらず、人があふれる議事堂前で一つの空白地帯ができていた。

隼人はさりげなく浩子の手を離れた。浩子はそれに気づかずその場を離れなかったが

「浩子！！」

それを見逃さなかった景正が浩子の右腕を取り、抱き寄せた。

次の瞬間、景正は右手を大きく上げる。それを合図に神取ら捜査一課の刑事たちが隼人に飛び掛った。隼人は抵抗することなく彼らに飲み込まれた。

隼人らを飲み込んだ人ごみは浩子にも迫っていた。少しでも話を聞こうとする報道陣、それを守ろうとする警官や秘書たち浩子はそれらの中でもまれにもまれた。

カメラのフラッシュの眩しさと、息苦しさ、体がぶつかる痛みか

ら逃れようと浩子は上を向いた。空がある。山の中より見える星の数ははるかに少なかった。

く改正・完く

最終回 議事堂から見る空（後書き）

数年前よりニュースで取り上げられてきた少年犯罪と少年法、それに関する政治の動き。それらに対しての自分の思いを書いてみました。

少年犯罪に対しての国の対応はこの作品を最初に書いた頃より変わってはいますが、まだまだ議論すべきところがあると思います。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。また別の作品でお会いしましょう。ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9811c/>

改正

2010年10月8日15時53分発行